



始



535
118

廣東省立第一中學
圖書館



安田興四郎述

實用經濟學講話

大正
14. 4 20
丙午

835-118

序

著者は十年以前に一度經濟原論を書かうとした事があつたが、思ふように書けないので中止した。當時其仕事を續けたならば、恐らく本書に比べて遙かに六ヶしいものが出來上つてゐたであらう。其頃は、六ヶしい理屈を並べて、讀者を感服させたい位の野心もあつた。今では、理屈は成る丈け省略して、平凡で判り易くといふ心が先に立つ。進化か退歩か自分には判らない、讀者には本書の如き書振りが氣に入るであらう。

著者が最も力を注ぎたいと思ふのは、此次に出す經濟動態研究

である、實用といふ二字を冠したのも、主として動態研究に關聯しての事であつた。本書はそれに對する豫備智識として、編述したものである。動態研究は趨勢的變動論と、循環的變動論の二冊になるかも知れぬ。次に財政及經濟政策論、貨銀及地代論を作れば、合せて五冊で完成するわけである。大正十四五の兩年中に、全部書上げたいと考へてゐる、引續いて愛讀を希ふ。

大正十四年三月

著 者 識

實用經濟學講話 目次

第一卷 實用經濟學講話

第一章	價值と價格と物價.....	(六)
第二章	需給構成の變化.....	(二六)
第三章	貨幣.....	(四五)
第四章	金融.....	(五九)
第五章	物價の騰落.....	(七五)
第六章	價格の變動.....	(九〇)
第七章	交換の目的.....	(一〇九)

一〇二一

第八章 競争の各種變態……………(一〇二)

第九章 生産……………(一二九)

第十章 生産費の貴廉……………(一四六)

第十一章 産業進化の趨勢……………(一六六)

第十二章 資本勢力の移轉……………(一七八)

第二卷 利子及利潤論

第一章 利子の起因……………(一九一)

第二章 貯蓄の性質……………(二二八)

第三章 資本の需要……………(二四六)

第四章 利子歩合の決定……………(二六五)

第五章 金融市場と金利……………(二八六)

第六章 企業利潤の性質……………(三一〇)

第七章 資本の社會的効用……………(三三六)

…………… 目次終……………

實用經濟學講話

安田與四郎述

緒言



經濟上の諸問題を解決する爲には、經濟學上の基礎智識を必要とする、而かも我國民全體を通じて、その素養あるものは、極めて僅少に過ぎない。併し日常の經驗から或る程度の理解は持つてゐる。それ等の常識經濟論は、概ね學理に適合する筈であるが、時としては全く見當違に陥ることもある。何と云ふても百數十年間に亘つて、各國の學者が研究した結果を、學習しないのは損である。唯既に壯年を過ぎた人にまつては、教科書式の經濟原論を、新規に讀み初めることは、可成り苦痛であろう。學者

は定義とか分類方法とか、微細な意見の相違等に関して、縷々數千言を費したり、常識で判ることも、冗く説明したりするからである。それ等の點を出来る丈省略して例へば經濟學上に於ける最も重要な原則や、常識判斷の間違易い點なきを、出来る丈簡明に、且つ實際問題と結び付けて説くことが出来たならば、讀者の苦痛を軽減して、比較的容易に經濟學の要點を、會得させられようかと思ふ。吾人は所謂學者ではないから、前人未發の新説を樹て、世人を驚かさうといふ野心は持たない。唯成べく興味ある説明方法によつて、經濟的智識の普及に資したいを考へて、本書を編述するこゝを思立つたのである。之れによつて多少でも我産業の進歩に貢献するこゝを得ば望外の幸である。

緒論

經濟學は富(有價物件)の生産、消費に就いて研究する學問である、而して生産の一變態としての交換、及び生産關係者間に起る分配問題とが、最も重要な題目となる。有價物といふ言葉の中には、既に交換即ち賣買の行はれることが含まれてゐる。交換の行はれない生産及び消費も經濟行爲には相違ないが、交換が行はれない限り、社會關係は起つて來ないから、社會科學としての經濟學の問題範圍には入つて來ないのである。自然交換は經濟學研究の出發點となり、交換を支配する根本動力として生産と消費とを研究すべき順序である。

分配問題は一貨物の生産に二人以上の人が關與する爲めに起る、單獨な個人的生産には左様いふ問題は起らない。社會科學たる經濟學は之れを研究の主題とすべきで、

交換及生産消費の三項目は、之れを解決する基礎材料たるに過ぎない。併し研究者の素質や性僻の異なるに随つて、主力を注ぐ點も自ら相違し、或者は生産の技術的研究に努力し、或者は交換に随伴して生ずる價值價格の變動を重要視し、或者は消費の社會的効果に重きを置く。

生産に參與するものは、土地の提供者たる地主、勞力の提供者たる勞働者、資本の提供者たる資本家、の計畫及統率者たる企業家の四階級である。總て貨物を生産するのには、此四つの要素を必要とする、尤も一人にして右の四階級を兼ねることも出来るが、社會の進歩するにつれて、四階級の區分は益鮮明になつて来る。斯くて各階級の受ける分け前は、地代、賃銀、利子、利潤と區分されるのである。随つて此の四つが、經濟學研究の主題となる。

生産に關する問題は主として技術的方面に屬し、常識論が比較的適確に當筈る。交

換に關する問題も概ね技術的であるが、貨幣の使用に伴ふ價格の變動を中心として、複雑な關係を生じて、常識判斷を謬らせる事が多い。消費に關する問題は、大分に道徳上及政治上の問題と交差する場合が多い。政府及公共團體の財政の如きは、此題目中の重要部分を占める。

經濟學研究者の立場から見れば、基本的經濟行爲たる生産及消費の研究は、單に豫備智識として必要であるのみで、主力は却つて二次的現象たる交換と分配に注がねばならぬ。而かも、上記四種の階級が一つの生産に參與することも、交換の一變態と見做し得るから、結局經濟學は交換に關する學問だといふに歸着する。斯ういふ見解の下に、經濟原論を著した學者として、ペリーといふ人が、最も卓越してゐるやうに想ふ。技術的方面の研究者としては、恐らくマーシャルを第一位に推すべきであらう。

第一章 價值と價格と物價

(一) 價 値

人生に有用なものは、總てそれに相應する價值を持つてゐる、併し空氣や水の如く人生に必要なものでも、經濟上の價值を持たないものがある。經濟上に於ける價值は人が勞力を加へて、人類の目的に適合させたものゝみに現はれる。無價の水も水道を作つて、都會へ引込むときには、それに要した勞力の多少に従つて、それ相當の經濟的價值を持つ。即ち貨物の經濟的價值は、其生産に要した勞力分量の多少に應じて現はれるものである。

人類生存の必要から云へば、空氣や水や日光などを除外すれば、食物が第一の必要物である、其順序から云へば食料品が最も高價であるべき筈である。併し人類が食物

を食用するや、満腹するにつれて、それに對する慾求を減じて往く、されば其供給が豊富であればある程、その價值は減ずる。それ故現在生存する人類を、養ふて往くに足る丈の食料を生産するに止めねば、それに費した勞力に對する、正當の報酬すら得られなくなる。太古以來人類の生産行爲は、自然に此法則に適合し、無駄な勞働を避けて、出来る丈け有効な方面に勞力を用ひようとしたのであるが、唯本能に従つて行動した時代には、天災地變や、社會的動亂等の爲めに、豫期しない結果が起つて、屢種族の繁殖が妨げられた。社會の進歩するにつれて、生産と消費の適合に關する研究が、次第に精密の度を加へるに同時に、最も有効に勞力を利用する工夫が進んで來た。總て最小の勞力を以つて、最大の効果を擧げるにこころが、經濟行爲の根本原則である。之れは生産行爲の基準であると共に、消費に就いても同様である。

食物の効用は空腹を充するにつれて減つて來る、衣服も身體を蔽ふことが出來れば

それ以上の要求は次第に緊切さを減ずる。家屋の効用も雨露を凌ぐのが最大で、それ以上の要求は次第に緊切でなくなつて往く。之れを稱して効用漸減の法則と唱へる。人は消費物を選ぶに當つて、成べく効用の高いものを採用する、即ち最小の勞力を以つて最大の効用を享受せんとするものに外ならぬ。一つの貨物に對する慾望は、それを満足せしめ得た瞬間に於いて、効用漸減の極限に達する、而してその時には更に他のものを慾求する。斯くて特定貨物に對する人類の慾望は有限であるが、次々に他の慾望が起つて來て、何處まで往つても際限がない。其處で經濟學では人類の慾望は無限りと説く。特定貨物に對する慾望の有限性と、全貨物に對する慾望の無限性とが産業進化の基調を成して、色々の波紋を描き出すのである。

貨物の經濟的價値は、曩にも記せる如く、その生産に要する勞力分量によつて決まる、併し此原則は色々の事情に妨げられて、實際には當て筈らない。それ等の事情を

研究して、最小の勞力によつて、最大の効果を擧げる目的を達せしめるのが、經濟學の主要任務なのである。

(二) 價 格

吾人は日常同一品質同一分量の貨物が、同一市場に在つては、必ず同じ相場で賣買される事を知悉してゐる、併し同時にその生産に要した勞力が、必ずしも同一でない事を知つてゐる。例へば米一石を作るのに、甲は二百時間を要し、乙は三百時間を要するとする、而かも甲がそれを綿布二十反と交換するならば、乙も亦同じ割合で綿布を受取る外はない。さうして此の如き現象が起るかは、讀者も大抵御承知の事と思ふ簡單に云へば賣手と買手の競争によつて、總ての商品は同じ相場で取引されることになるのである。斯様に供給と需要の競合によつて、定めらるゝ貨物の値打ちを、そ

の物の價格又は市價と云ふ。經濟學上で取扱ふ價值は即ち此價格を指すのであつて、それは必ずしも其人生に對する効用の大小、又は其生産に要する勞力の多少と一致するものでない。即ち價格を定義すれば、その物が他の貨物と交換される割合だと云ふことが出来る。

少し文明の進んだ國では、交換を容易ならしむる手段として、且つ價格の大小を測る尺度として、貨幣を使用する。随つてそれ等の國に在つては、右の交換割合は貨幣によつて表示される、之れも讀者の皆知つてゐる事ゆへ、詳しく説明するには當るまい。唯一つ斷つて置きたいのは、物價といふ言葉は、價格と同じ意味にされるが、一般の習慣として、それは貨幣に對する商品全體の總平均相場といふ意味に使はれる。即ち物價は貨幣の騰落と常に逆比例するものであるが、特定貨物の價格はその物の供給状態によつて色々に變動する。但し近代社會に在つては、貨幣價値の變動が、個々

の商品の需給の上に著しい影響を及ぼす、此點は後に詳しく述べる。

貨物の交換割合即ち價格は、需要供給の競争によつて決まる、自然供給が少くして需要の多い貨物を生産するものが、最も有利な立場に立つ。併し一國の産業分布は、其處に生息する民衆の要求に順應して、自然に發達して來たものであるから、著しい過不足即ち需給の不均衡は起らない。唯自然の障害(天災地變等)や、社會的事變(戰爭、政變等)や、嗜好の變遷等によつて、需給の上に稍や急激な變化が生ずる。其場合には個々商品の交換割合が大に狂ふ。

人類の慾望の配合は千差萬別である、同額の收入を得る人の間にも食道樂もあれば着道樂もあれば、器物道樂もある。貧者と富者の間に在つては、其差が一層甚しく、或る者は收入の半額以上を食物に費し、或る者は其萬分の一しか食料費に使はない。斯様な相違があるに拘らず、一時代一社會に就いて見れば、總ての貨物に對する需要

高は、急激に變化しないのを普通とする。自然一國に於ける産業の分布も急變しないのを普通とするが、戦争等の場合には需要に激變が起つて、各貨物の生産者及所有者に豫期せざる、損益を與へる。最小の勞力によつて、最大の効果を收める爲めには、出来る丈けそれ等の變化を先見せねばならぬ。

(三) 需要と供給

學究的に説明すると、需要供給を説く前に、經濟進化の大體の筋道を述べて、分業の發達から交換の行はるゝに至る順序を記さねばならぬ。それは餘りに煩はしい故、交換は私有財産制度確立以前に、種族と種族、部落と部落との間に行はれ、私有財産の確認後は、次第に現時の状態に進んで來たさいふに止める。交換の媒介として貨幣の使用されたのは、頗る古い事であるが、それ以前に物々交換時代のあつたことも、

一般に認められてゐる。而して物々交換時代には、對價の計算が精密を缺き、且つ貨物の種類が少くして需給の適合が困難であつた爲めに、公正な評價が行はれ得なかつたことは、略ぼ推測される。

物々交換に在つては、買ふことは同時に賣ることを意味する、他人の物を收得する爲めには、同時に自己の所有品を、他人に收得させねばならぬからである。此關係は貨幣を使用するに至つても、根本から覆されたわけではない。貨幣は品物と品物との交換の媒介をする丈けて、貨幣の收得を最終目的とする賣買は、理論上有り得ないものである。處が世相が複雑になるに隨つて、此根本原理が表面の事相に蔽はれて、賣却とは貨幣の收得を目的とする行爲、購買とは貨幣の支出を意味する行爲であるように誤認され、需要と供給との相對性が、動もすれば閉却される。之れが爲めに常識經濟論は色々の間違に陥る。

貨幣が賣買の最終目的の如く誤認されるのは、それが交換の仲介以外、貯蓄の手段として利用される爲めである。貨幣材料たる貴金屬は、容積の小さいこも、耐久性が多いこも、何時にも他の貨物と交換し得ること等の特徴を持つ外に、最も相場の變らないものと誤認されてゐる爲めである。古來多くの政治家は輸出を奨励して、貴金屬の國內流入を圖つた。經濟學者はそれを重金主義と稱して、嘲笑する。外國との戦争接近が豫想される如き場合には、正貨を貯藏することも必要だが、普通の場合金銀を貯め込んで喜ぶのは、愚の極である。當今米國は四十五億弗の正貨を抱有するに至り紙幣發行準備としては必要以上に多い爲めに、學者も實際家もその處理に苦心してゐる。之れを死藏するのは利子の損失を招くものであり、之れを貨幣として利用すれば徒らに物價を高めて、種々の弊害を生ずるからである。今日の如く貯蓄の生産的利用に利子の付くことが、一般的に明白に判つて來れば、貨幣が賣却の最終目的であり得

ないことは、益鮮明に會得されるわけだが、一概に然うきは云ひ兼ねる、此事は後に再び説明する機會もあるであらう。

儲て需要は供給を相對するものである、隨つて或る貨物の需要は、必然的に他の貨物の供給を伴はねばならない。即ち需要は自己の所有物を以つて、他人の所有物を收得する行爲を指すものである。何人も他人の所有物を慾求する意思は持つてゐるが代償物を提供し得なければ、それは需要にはならない。學者は此事實を指して購買力を伴はない慾望は、需要に非ずといふ。斯くて或る貨物に對する需要とは、其慾求者がそれに對して提供せんとする對價の總數量を指すのである。人類の慾望は無限であるといふ出發點から見れば、如何なる貨物にも絶對的過剰は起り得ない筈である。唯其慾望は購買力によつて制限さるゝゆへに、或る貨物に對する需要が、其供給額に達しない場合を生ずる。而かもそれは反面から見れば他の貨物の供給が不足してゐるの

だとも云へるのである。其處で多いもの、價格が下り、少いもの、價格が上つて、需要供給とを適合させる。是れが貨幣の使用を除外して考へた需要供給の實相である貨幣の使用は此事實に若干の變化を起させる、而して世人は多く其變相に迷はされて需給相對の原則を忘却する。

(四) 供給の増減

或る一種類の貨物に就いて云へば、需要よりも供給の方に變化が起り易いものである。之れは經濟進化の總ての時代を通じて同様であるが、農業中心の時代に於ける作柄の良否に伴ふ供給の増減の如きは、最も著しい例ミすることが出来る。工業中心の現代に在つては、景氣の消長につれて、供給に著しい増減の起ることは、何人も知る如くである。唯農業に在つては、自然力が供給の増減を惹起す場合が多く、工業に在

つては生産者の意思によつて、供給を人為的に増減させる。随つて農産物の價格は工業産物に比べて激變すべき性質を持つてゐるが、時としては正反對の現象を惹起すこともある、工業物に在つては需要の増減が農産物よりも甚しいからである。

曩きにも述べた如く人類の慾望の配合は、急激に變化するものでなく、而して産業の分布はそれを基本として、自然に行はれるものであるから、甚しい供給の過不足は起るまじき筈である。併し作柄の豊凶に由る食料品の過不足の如きは、可成り高度に達することもある。左様な場合には供給の豊富が需要を増加し、其缺乏が需要を減少させる。供給の過不足に従つて、價格が騰落して、購買力との釣合を保たうとするからである。例へば日本に於ける米の平均供給高を、六千萬石と假定し、それに對する購買力を十八億萬圓とする、其場合の一石平均價格は三十圓であるが、六千五百萬石の收穫があればそれが二十七圓七十錢弱となり、五千五百萬石の收穫であれば、それ

が三十五圓七十錢強になり、斯くて相場の變動によつて、購買力ミが釣合ふ。併し實際は斯ふ單純には往かない、特定貨物に對する需要の増減は、必ずしも供給の増減に伴はないから、米の如き効用漸減の度の強い、而かも必要の度の強いものに在つては供給の増減は價格の上上記の割合よりも遙かに激しい變動を惹起す。此點を理解する爲には、需要の増減ミ、それに伴ふ購買力構成上の變化を研究せねばならぬ。

(五) 需要の弾力

貨幣を除外して考へるミ、總ての貨物は互に需要となり、供給ミなつて相對立するものゆへ、其中の一つの供給量が急に減少すれば、それが他の品物ミ交換される割合がそれに伴れて高まり、又供給が増加した場合には、其價格がそれにつれて低下して結局需要と供給とは相變らず適合して往く筈である。處が總ての貨物は人生に對する

緊急さの程度を異にし、且つ効用漸減の極點に達するまでの範圍に著しい廣狹の差がある。例へば食物は飢を凌ぐ程度に於いては、絶對必需品であるが、飢を凌いで了へば忽ち飽滿の域に達する。衣服の如きは、必要さの度に於いて食物ほどではないが、化粧品などよりは遙かに緊要であり、而かも貯藏に損失を伴はず、且つそれに對する嗜好が複雑であるから、容易に効用漸減の極點に達しない。果物の如きは緊要の度が低いと同時に、効用漸減の範圍が狭い。斯くて人生に最も必要なものは、供給が減つて價格が騰貴しても、需要は其割合に減少せず、比較的緊要でないものは、供給減少に由る價格の騰貴が、著しく需要を抑へる。供給増加の場合には、丁度それと正反對の結果を生ずるわけである。價格の騰落が需要の増減を惹起す度合の大小を稱して、需要彈力の多少といふ。米の如きは彈力の乏しいものであり、織物の如きは比較的彈力に富むものであり、果物の如きは需要收縮の力が強くして、増加する彈力の弱いも

のである。鮮魚や野菜類も何れかと云へば、果物に近い性質を持つてゐる。總ての貨物は需要の弾力が相違するにつれて、供給増減に伴ふ價格の變動狀況を異にする。

日本で云へば米が最も需要の弾力を缺いてゐるものである、随つて其作柄の豊凶は甚しく價格を騰落させる。而かも相場が上つても需要が減らないから、自然凶作の場合には購買力の米に向けられる分量が増加して、他の貨物に對する需要が減る。尤も一面には米の價格騰貴が、他の貨物に對する需要を増加して、自然に需給の適合を作り出すが、それは米を比較して他の品物の値段が下がる事を意味し、農家の災厄が社會全般に分布されることになる。斯くて古來凶作は社會の不幸と見做されたのであるが、社會が複雑に趨くにつれて、是れ等の關係が次第に變化し、當今では凶作の爲めに、國民の受ける苦痛が大分に軽減されて來た。それ等の事情に就いては、後に詳しく説明する機會があるであらう。

(六) 需給の構成

一國の産業は人類生活上の慾望の分布を基礎として、自然に發達するものであるから、總ての貨物の供給は、略ほ其需要と適合して往くわけである。假りに總ての貨物を飲食物、被服、器具住宅の三つに分け、飲食物五、被服三、器具住宅二の割合で生産されてゐるとすれば、それは同時にそれ等の貨物に對する需要分布の割合を示すものと見做して差支ない。處が實際は總ての貨物の生産高は一定不動のものでなく、自然的に又は人爲によつて、常に増減する。而してそれに伴ふ價格の騰落が、其生産者の購買力を増減させ、並びに其消費者の購買力の配分割合を變化させる。例へば豊作の爲めに米價が著しく下れば、農家の購買力は減る、それと同時に従來米に對して收入の四割を拂ふてゐた人が、三割で足りるゝなれば、其剩りの一割は他の品物の購入

費に充てることが出来るから、それ等の品物の需要が殖へる。斯様な關係から一國に於ける諸貨物供給の構成状態(各種貨物の生産割合)が常に變化すると同時に、需要の構成状態(各種貨物の消費割合)も、それにつれて色々に變化する、而してそれが直に諸商品價格の變動を惹起すことになる。

且つ又た緩慢ではあるが、人類の慾望の配合も、時代の進歩につれて徐々に變遷して往く、其處で需要の構成状態の變化も亦、供給の構成状態を變化させる。日本酒の變りに麥酒が飲用されるようになったり、絹織物の代りに毛織物が使用されるようになった如きは、即ちその例である。總ての生産者は此需要の變化に注意して、常に時勢の要求に應じて往かねばならぬ。それを怠るものは經濟上の競争に於いて、劣敗者の位地に立たねばならぬ。

文化が進むに従つて、人類は其生産した貨物の一部を、將來の必要に備へる爲めに

蓄積して往く、即ち貯蓄をする。此貯蓄は供給及び需要の構成上に、著しい影響を與へる。現代に於いてはそれ等の貯蓄が、一ヶ年の消費貨物の數十倍數百倍に達してゐるものすらある。それ等の貨物に在つては、貯蓄財が需要の彈力を大きくする。

(七) 貨幣の使用

交換の媒介物としての貨幣の使用は、有史以前から初まつてゐる、併しそれが精確に價格の標準となつたのは、法律によつて貨幣の單位を一定した後と稱して差支あるまい。それとて可成り古い事だが、一國內を通じて同一の本位貨幣が採用さるゝに至つたのは、比較的近代の事である。當今では總ての文明國は法貨を制定し、それによつて貨物の價格を表示する。即ち貨幣は單に交換の媒介としてのみでなく、價格計量の尺度として用ひらるゝに至つたのである。斯くて各種商品價格の騰落を、頗る簡單

に知り得ることになつた。

貨幣が一般的に使用されるようになるに、貨物の提供者を賣手と云ひ、貨幣の提供者を買手と喚ぶ。其處で需要供給に於ける貨物相互の對立が、貨物對貨幣の對立となつた如き外觀を呈する。而かも實際は矢張り貨物相互の對立が已むわけではなく、唯貨幣の介在によつて、多少貨物相互間の關係に變化が起るのみである。

貨幣が單純に交換の媒介をしてゐる間は、或る商品の需要は、他の商品の供給を意味し、或る商品の供給は他の商品の需要を意味するが、貨幣その物に需給の増減に、それに伴ふ價格の變動が起る爲めに、時として商品の貨幣化運動が起り、時として貨幣の商品化運動が起る。その結果として物價の騰落といふ現象が生ずる、此の現象は經濟學研究に於ける最も興味ある題目であると同時に、實際家にとつても頗る興味ある問題である。

物價とは曩にも記せる如く、貨幣に對する商品全體の總平均相場を指すのである。随つて物價が高まるといふのは、貨幣が下落することであり、物價が下るといふのは貨幣が騰貴することである。但し商品全體の總平均相場は、到底調査し得ないから、通例數十種乃至百數十種の代表的商品の平均相場を採つて、假りにそれを物價と唱へてゐる。過去の經驗はそれによつて略ぼ貨幣價格變動の跡を、知り得べきを實證してゐる。

當今世界各國の使用してゐる貨幣は、金か銀か、若くは其兩方を材料としてゐる。貨幣の價格と其材料たる金銀の價格とが、どういふ關係に立つかは、可成り議論のある問題である、此點に就いても後に詳しく説明する機會があらう。

第二章 需給構成の變化

一國の産業分布は其の國民の需要の反映である、(姑く外國貿易關係を除外して考へる) 随つて總ての貨物の生産は、其需要高に比例して行はれ、而して供給の構成は需要の構成と一致する筈である。而かも實際は兩者の間に、屢錯誤を生ずる。其錯誤は需要の増減からも、供給の増減からも起るが、まづ供給の方から考察して往かう。

需要に増減が起らないと假定すれば、供給の過不足は或貨物の生産高の増減に由るものである。生産高の増減は生産者の意思によつて起る場合と、意思に反して起る場合がある。加工品や礦産物は大抵生産者の意思によつて任意に増減され、農産物は生産者の意思に反する場合が多い。併し礦産物には世人の豫期せざる急増急減の起る場合もある。斯くて生産者が任意に其生産高を増減し得ないものほど、供給の過不足

を生じ易い。但し現代の經濟組織に於いては、其生産高を任意に増減させ得る貨物も他の事情に制せられて、容易に増減させ得ない場合を生ずる。斯くてそれ等の貨物に在つても、長い間、供給の過不足が繼續される事がある。

農産物の如く供給の増減が必ずしも生産者の意思に由らないものは、作柄の豊凶が供給の過不足を來す主因となり、それを調節する手段として、(一)外國貿易、(二)代用品の使用、(三)價格騰貴に由る消費の抑制、(四)過剩期に於ける貯藏、(五)用途の擴張又は縮少、(六)次年度作付反別の増減、並びに極端な場合には(七)收穫の抛棄が行はれる。其中第三丈けが自然に起る調節作用で、他の六つは皆人爲によつて價格の騰落を抑へんとするものである。人爲的調節作用の行はれ易いものに在つては、豊凶に伴ふ供給の増減によつて價格の騰落する程度が弱く、その作用の行はれ難いものに在つては、甚しい變動を生ずる。但し社會の進歩するにつれて、人爲的調節の力が次

第に強くなる傾向を持つ、就中國内交通機關の完備と、外國貿易の發達とは、著しく供給の平衡を保たしめる。

任意に供給高を増減せしめ得る工産物の如きに在つては、生産者の需要測定の間違が、供給の過不足を惹起すものゝ稱せられる。外見から云へば慥かに然うである、併し實際は需要者の方にも、測定違があるのである。元來需要には最終需要(實需)と中間需要(假需要)とがある、中間需要とは轉賣を目的としての需要であつて、それ等の需要者は最終需要者に對する供給者となるわけであるが、それ等の人達は往々にして實需分量の測定を謬まつて、延いて生産者をも謬らしめる。最終需要者と雖全く錯誤に陥らないわけでない、即ち近き將來に於ける自己の購買力に就いて測定違ひをするこがある、而してそれも供給の過不足を惹起す原因となる。尙ほ此事に就いては、後に詳しく説明する。

(一) 生産費と價格

供給の構成が需要の構成と一致する場合に於いて、總ての貨物の價格はその生産に要する勞力分量(過去及現在の)によつて決まるわけである。換言すれば各貨物の價格は、その生産費によつて決まる筈である。處が實際は然うは往かない、之れは供給と需要との間に、錯誤が起ると、生産費が常に變化するからである。其處で學者は此點を考慮して總ての商品の「價格は結局に於いて再生産費に近づく傾向を持つ」といふ風に説明する。再生産費とは其品物を現在の生産組織の下に、新規に生産する費用といふことである。而して結局に於いていふ言葉の中には、可成り長い間生産費と一致しない場合あることを暗示してゐる。此原則は極めて曖昧なもので、實を云へば市價と生産費とが一致する場合は稀有の現象である。唯何人も自己の勞働の結果を成

るべく高く賣らうと競争する爲めに、市價は生産費に近い處に決まるのである。

どうして市價が再生産費に接近するか云へば、或る貨物の市價が之れより低ければ、其生産者は損をするから、他の貨物の生産に従事することになつて、其物の供給を減少せしめて、價格を高める、反對の場合には其生産が利益を産むから、多くの人が其物を生産するこゝになり、其供給を増加して價格を低下させる、そして双方の間に損得の差がない處まで此運動が續くので、市價は結局再生産費に近づくのである。斯くて價格の騰貴は供給を増加させ、其下落は供給を減少させるこゝいふ原則が、一般に承認されてゐる。此原則が行はれるから、供給の構成が常に需要の構成に一致せんとする傾向を示すのである。そして産業の分布が、人類慾望の配合と略ほ一致して往くのである。戦争や天災等によつて、需要の構成が急變する場合には、供給をそれと合致させる爲めに、産業界に急激な變化が起る。日露戦争や歐洲大戰の當時は、それ

に關する實例が盛んに提供されてゐる。

(二) 資本及び勞力の移轉

生産者が不利益な事業を已めて、有利な事業に移るのを稱して、資本及び勞力の移轉といふ。斯ういふ現象の起ることは、日常の経験によつて、よく知られてゐる處だが、偕て實際に於いて職業を變へるこゝいふこゝは、決して簡單に出来るわけでない。大工が左官になり、左官が石工になるのすら、多年練習の効果を棄てなければならぬ。況んや農夫が職工となり、漁師が農夫となる如き、當分は他人の半分の收入すら得られない事がある。之れは勞働者丈けに限つたこととなく、資本の移轉は更らに困難なことがある。例へば造船所を機械工場に變へるこゝか、荷馬車を自動車に變更するとかいふ如き、比較的類似してゐる仕事に移ることすら、多額の損失を伴ふものであ

る。斯様に資本及勞力の移轉には、不便及び損失を伴ふから、或種の事業が他に比して利益が無いからきて、即時に有利な事業に資本及勞力が集中するこいふわけに往かず、随つて可成り長い間、一方には生産費を償ひ難いものがあり、他方には普通以上の利益を収めてゐる事業があるのである。大正十年以後に於ける造船製鐵事業と、麥酒釀造、綿糸紡績業との間に起つた収益状態の相違の如きは、其一例とすることが出来る。勞力及び資本の移轉が絶対に自由でない以上、一國の産業組織は必ずしも國內に於ける需要の構成と一致しない。

但し有利な事業は十分に其生産設備を活用し、然らざるものは出来るだけ生産を手控へるから、需要と供給とは、割合に短期間に適合する傾向を示す。随つて生産設備過剰と供給過剰とは、明白に區別せねばならない。供給過剰は其製品市價をして生産費以下に降らしめるが、生産設備過剰は必ずしも然らず、製品市價を生産費よりも高

位に在らしめるこももあるが、併し其事業に従事してゐるものは、二つの理由から少額の利益に甘んぜねばならぬ。第一には製品市價が高まらうとすれば、忽ち生産高即ち供給を増加して、其價格を低下せしめて、生産原價に近づかしめる。第二には供給を適度に止めて、製品市價の低下を起さしめまいとすれば、工場又は機械の一部を、無用に遊ばせて置き、而かもそれに對しても保存修繕費をかけたたり、適當の原價鎖却を行ふて往かねばならぬから、全體の資本に對する利益は尠からざるを得ない。好況期に各種の生産事業に過度の新設擴張の行はるゝ結果、反動の起つた後に至つて、久しきに亘つて事業収益の減少するのは、斯ういふ理由に基く。之れは企業利潤を説明する際に詳しく述べべきことだが、貨物の供給が思ふように調節し難いのだこいふ事實を知らせる爲めに、一應此點に論及したわけである。

(三) 貯藏に由る調節

貯蓄の目的は過剰貨物を保存して、不足期に備へるに在る、壯年時の所得を貯へて老後に備へるのも、豊作年の收穫を貯へて、凶作期に備へるのも、其意味は同じである、唯前者は主觀的過不足を標準とし、後者は客觀的過不足を標準とする處に、相違があるのである。併し人の行爲は智識の進むにつれて、複雑性を帯びて來る、即ち貯蓄に在つても當初は老衰、疾病、災厄等に備へる目的であつたものが、第二段に於いては生活上の目的を加味され、第三段に至つては子孫の繁榮をも其目的の中に數へ更に進んで富の蓄積に伴ふ社會的勢力の増進をも數へる。斯様に貯蓄の目的が複雑になるにつれて、社會には常に豫備的購買力をも稱すべきものが存在し、それが需給を調節する一面、時としてそれを攪亂する原因にもなる。豫備的購買力が投機に濫用

さるゝ場合の如きが、即ちそれである。此點は需要に就いて述べる際に更に説明するとして、此處にはまず貯蓄の需要調節力に就いて述べる。

現代の人は貯蓄を計量するのに貨幣を用ひる、即ち現金勘定のみを貯蓄と見做してそれを所有物資とは區別する。併し實際に於いて貨幣の形で貯藏さるゝ分量は、極めて僅少であつて、郵便貯金、貯蓄預金、保險掛金、銀行預金の大部分も、大低何等かの品物に代つてゐるのである。唯其所有者と貯蓄者とが、別人であつて兩者を連結する手段として、複雑な貸借關係が成立つてゐるのである。而して其貸借關係は需要と供給とに、多大の影響を與へるが、その詳細は金融關係を説く場合に譲らねばならぬ。此處では其所有者の何人であるに拘らず、社會には常に豫備的供給(貯藏品)と、それに對する豫備的購買力(貯蓄)とがあることを承認すれば足りる。

農産物の如く任意に生産高を限定し得ないものに在つては、常に若干の貯藏品を次

年度に繰越して、凶年時に備へることが、社會的に必要であると同時に、各個人にとつても利益である。蓋し自然に放任すれば豊作期の農産物は甚しく低廉になつて、生産費を償ひ得ない、其際過剰部分を貯藏すれば、其値下りを喰止めることが出来る。農家は其自衛的本能に導かれて、自然に斯ういふ手段によつて、過度の値下りを防ぐ。若し次年度が凶作であれば、其貯藏したものを高値に賣却することが出来て、それによつても亦利益を収めることが出来るから、貯藏行爲の利益は二重になるわけである。但し豊作期の剩餘貯藏は生産者を保護して、消費者の利益を殺ぎ、凶作期の貯藏品賣出しは、消費者を保護して、生産者の利益を殺ぐようだが、斯様にして價格の動搖を調節することは、消費者をして過大の負擔に苦しましめず、生産者をして耕作反歩増減の損失を免れしめて、結局社會全般の利益となるものである。併し現代の如く外國貿易が盛んになつて、輸出入による價格の調節が高度に行はれ、而かも金利や貯藏

費用の高いときには、長期に亘る農産物の貯藏は、貯藏者にとつて損勘定になる場合が多い。それ故貯藏に由る自然調節が、十分に行はれ難くなる。此状態を自然に放任するときは、國內の農業は豊作期に於いて、需給の適合する程度まで衰頽して、凶作時の不足を常に外國から仰ぐことになる。豊作期には供給過剰の壓迫によつて、割安に賣らねばならず、凶作期には外國品の輸入によつて、それに相當する高値で賣ることが出来ず、農業をして常に不利な位地に立たしむるからである。

日本に於ける租税米納の制度は、米價騰落の負擔の一部を、政府及び士族階級に轉嫁した、それが廢止された後でも、小作料米納の制度が残つてゐて、毎年地主と小作人との間に複雑な利害關係を起さしめてゐる。之は我國經濟界に於る極めて重大な問題であつて、若しも凶作時に於ける小作料歩引きの習慣がないとすれば、小作人は年の豊凶によつて、非常な幸不幸に遭遇し、歩引きの習慣が行はれるときには、地主は

米價の平準化によつて、收入に多大の差を生ずる。大體から云へば外國食料品の輸入は、日本の如き人口稠密なる國に在つては、農業の衰頽を惹起すべき筈である。耕境の低下（此事は後に説明する、一言にして云へば比較的肥沃でない土地までも耕してゐる意味である）によつて、食料品の生産費が外國よりも割高だからである。近年政府が食糧局を設けて、自から米穀貯藏の任に當つてゐるのは、生産者に代つて價格の低下を調節してゐるものと解することが出来る。此政策の可否に就いては色々の議論があるが、農業の衰頽を自然に放任し得ないと思すれば、當然實行せねばならぬ事である。

(四) 工産物の貯藏

工産物は生産者が任意に生産高を増減し得るから、貯藏によつて需給を調節する必

要はない。併し總ての商品を通じて、交換を圓滑に進行せしめる爲めには、若干の在荷を必要とする。例へば綿糸に見れば、(一)紡績會社は供給を繼續して往く爲めに、常に若干の在荷を持たねばならず、(二)機業家は製織を繼續する爲めに、之れ亦若干の原料手持を必要とし、(三)問屋及小賣商は生産者から受取つて顧客に引渡す間に、何時も若干の現物を具へて置かねばならない。斯くて總ての貨物には常に幾許かの在荷が存續して、それが生産者、商人と、需要者との間に分布されてゐる。此種の在荷の多少、其分布状態如何は、需給状態を考察する上に於いて、極めて重要な事である。本來から云へば此種の在荷の分量も、其分布状態も、同じ時代の同じ社會に在つては、略ほ一定してゐるべき筈だが、物價騰落に對する各關係者の豫想や、金融狀況や、運輸力の過不足によつて著しい變化を示す。此點は何れ價格の變動を述べる場合に詳説するが、兎に角供給の構成を考へる場合には、常に在荷の多少を考慮に

加ふる必要あることを一應記憶して置かねばならぬ。

右にも記す如く工産物は、生産者が任意に供給額を増減し得るから、供給の過不足は容易に起らない筈だが、實際は必ずしも然うでない。それは生産者が需要の見積を謬る場合が多い外、生産の減少にも、或は又其増加にも、若干の時日を要するからである。生産減少に時日を要するのは、前にも述べた如く、資本努力の移轉が、自由に行はれ得ないのミ、各生産者は同業者との競争上、出来るだけ生産設備を活用して操業短縮に伴ふ不利益を避け、それによつて生産費を節約して、競争を續けて往かうとするからである。随つて小生産者の分立せる工業に在つては、生産不引合の爲めに己むを得ず作業を中止又は縮少する者の續出するまで、供給過剰状態は繼續して、生産者の手持品を増加させ、大生産者の對立せる工業に在つては、同業者の協定によつて、操業短縮の實行されるまで、供給過剰が續く。斯くして比較的長い間製品市價を

生産費以下に在らしめる。又その反對に供給不足の起つた場合には機械及工場を増設するにも、數ヶ月乃至一年以上の日子を要して、其間製品市價をして、生産費より遙かに高位に在らしめて、生産者に異常の利益を擧げしめる。歐洲大戦中に於ける我綿糸紡績業の如きは、供給不足が非常に長く繼續した例をこゝが出来る。

消費者側から云へば、生産設備が常に過剰であつて何時でも、休止工場の運轉開始によつて、供給を増加し得らるゝ場合が最も好ましい状態であり、生産者にとつては常に全能力を運轉し得て、需要増加の場合には、忽ち供給不足に陥るのが、最も有利な状態であり、社會全體から見れば常に過不足のないのが企業利潤の過大を惹起さずさればこそ資本の死藏をも惹起さないから、最も望ましい状態である。勿論常に需給相適合するといふ如き理想的状態は、何れの國にも前例のない事であるが、我國に在つては、企業家及投資者の無思慮によつて、特に甚しい生産設備過大を惹起す場合が

多くそれが財界全體に多大の損失を與へる。その事實に就いては後に詳しく説明する場合があらう。

鑛産物は全體に於いて工産物と同様に、任意に供給を増減し得るが、農産物と同様に偶然に増減の起ることもある。有利な新鑛山の發見された場合の如き、在來の探掘者は意外な不利な位地に立させられる。南阿金鑛の發見の如きは、其著しい例であり滿洲炭の發掘が内地の炭鑛業者を壓迫した如きも、其一例とすることが出来る。

(五) 需要の増減

貨物の供給は需要を基礎として現はれる、随つて需要の變化は、直ちに供給の上に反映する。即ち需要は形にして、供給は其影である筈だが、需要が供給の方に制せられて、變化する場合も尠くない。されば需要には自發的變化と受働的變化とがあるわ

けてある。需要の自發的變化は主として、人類の慾望の變化に従ふものであつて、普通これを嗜好の變遷と稱するが、詳しく云へば個人の自由意思によつて、消費の選擇が行はれる場合と、社會の狀態に餘儀なくされて、消費の選擇が行はれる場合とに於いて、需要の増減する狀況を異にし、それらの場合に於いて多種多様の變化を生じそれを一々研究することは、到底其煩に堪へない。けれど社會現象としての需要の變化を取扱ふ場合には、(一)人口増加に伴ふ自然増加、(二)生活向上に伴ふ自然の増加(三)風俗の變遷に伴ふ増減、(四)法規の制定に由る増減、(五)價格の騰落に伴ふ増減等に大別することが出来る。其中三と四とに就いては、一定の法則を發見することが困難であるから、主として一と二と五とが問題となる。

法規の制定に由る増減とは、米國に於ける禁止令發布による酒類需要の激減の如きを云ふ、學校官廳軍隊の服制の如きも、その材料に使用さるゝ織物の需要を増減さす

風俗變遷の著しい例は、衣食住に對する流行の變化であるが、之れは主として社會心理の研究に屬し、經濟學の對象としては適當しない。人口の増加と生活の向上は、大體秩序的に進むもので、それによる需要の増加は、經濟統計學に於いて、其概要を推定することが出来る。而してそれは産業進化の基調を成すもので、頗る重要視される此點に就いても何れ後に詳説するであらう。

經濟學上の問題として、最も重要なのは、價格變動に由る需要の増減であつて、之れが供給の増減と相關聯して、特定貨物の價格の騰落を調節する。此作用は物々交換の場合にも、自然に行はれるが、貨幣の介在を見るに及んで、それが一層迅速且つ有効に行はれると同時に、色々の副作用を惹起す。貨幣の使用はやがて金融の發達を促し、金醵の發達は購買力の増減を調節して、需供の極端なる不均衡を制限するからである。随つて此問題を理解する爲めには、一應貨幣及び金融に關する研究を試みねば

ならない。

第三章 貨 幣

(一) 貨幣の本質と其任務

現代の經濟現象を説くに當つて、貨幣の存在を無視することは、絶対に不可能である。自然貨幣を除き重大視し過ぎて、物々交換の原理を忘れることになるが、經濟行爲の最終目的が貨幣の收得にあらずして、貨物の消費に伴ふ慾望の満足である點を忘れさせねば、それに到達するまでの中間の過程は、貨幣の存在を前提とする方が却つて理解し易いのである。貨幣は本來其品物が一般に慾求されるものであるのを必要とするが、穀類や家畜などは、貯藏携帯及び分割等に不便を伴ふので、自然それ等の不便の少い品物が、貨幣として採用される傾向を示した。古代に於いて貝殻や皮革が

貨幣として用ひられたのも、近代に至つて金銀がそれに代つたのも、それが爲めである。即ち其の社會全體が貨幣として授取するものであるならば、必ずしも實質的價值（生活上の必需品であること）の存在を必要とせず、貨幣として使用されることそれ自體が、貨幣原料品の價值を構成する一大要素となつた。これは貨幣の本質に就いての基礎智識として、極めて必要な事である。世人は往々此原則を忘れ、金銀には現に貨幣として持つてゐる丈けの、實質的價值があるように考へる。十九世紀に於いて列國が金貨本位を採用した爲めに、銀の交換價值が下つたこと、紙幣が立派に貨幣としての役目を果してゐること等は、貨幣が必ずしもその表示する價格に相當する丈けの實質的價值を持つを要しない證據とすることが出来る。要するに貨幣は社會が法律又は習慣によつて、價值表示の道具として承認したものであれば足りる、唯それに用ひられる材料は、貯蓄携帯に便利であり、交換の必要に應じて分割することが出来る、そ

して偽造變造の容易に出來難いものであるを要する。金銀銅鐵紙等が最も多分に其特質を具へてゐる爲めに、自然に貨幣として採用されるに至つたのである。

貨幣の第一の任務は一定の價值を代表するものとして、交換の媒介をするに在る。一定の價值を代表するが故に、それが價值測定の尺度になる。一磅は一志の二十倍、一志は一片の十二倍といふ風に決められてゐるのは、一町は六十間、一間は六尺といふのと同じように、其使用者が一般に承認してゐる尺度なのである。當今、我國で使してゐる貨幣は一錢銅貨から上は一百圓紙幣まで十數種に分れ、一錢以上何萬圓の取引にも、差支ないよう出來てゐる。貨幣の使用がその位交換の實行に便宜を與へてゐるかは、今更ら説明する必要もあるまい。

貨幣は價值の尺度であるから、常に一定不變でなければならない。處が實際は常に其尺度が伸び縮みして物價を變動させる。其處で學者の中には、何とかして其不便を

除かうとして工夫を凝してゐるものもあるが、今までの處、別に名案も出て來ない。

貨幣は或る分量の價值を代表するものである、随つて貨物を貯藏する代りに、之れを貯藏する風習が起る。併し貨幣の貯藏は、盜難や火災等の危険を伴ふ爲めに、其保管を他人に依托する習慣を生じたが、その一面に於いて生産資本又は生活費の一時的缺乏を、他人の貯蓄によつて、補充せんとするもの、即ち他人の貯蓄を借用せんとするものが増加して來るので、此に金融制度が發達するに至つた。金融は貨物を貸借する代りに、金錢を貸借するものであるが、其本質に於いては失張り貨物の貸借に外ならないのである。此點は賣買の本質が、物々交換であるのと同様である。此事を十分に理解して置かないと、金融關係を観察する場合に色々の間違を生ずる。

(二) 貨幣に依る評價

交換の媒介として貨幣が使用されるようになると、貨物相互間の交換割合は頗る簡單に判る。牛一頭が米百石、米百石が羽二重五十四と交換される、それ故に羽二重一匹は牛一頭の五十分一に當ると云ふ様な面倒な計算をせず、總ての貨物を何千何百圓とか何十何圓とか何十何錢といふ風に、評價することが出来るからである。處て貨幣の値打ちが動かないものならば、それは唯總ての貨物の交換割合が、貨幣單位によつて言表はされるまでだが、實際は貨幣の價格も常に變動するから、貨物價格の變動には貨物相互間の交換割合の變化と、貨物の貨幣に對する交換割合の變化との兩面があるわけである。此二つの變動は大低の場合に於て混同され易いが、實際は全く其性質を異にするものである。前者を稱して商品價格の變動と云ひ、後者を物價の變動と云ふ。此二つが同時に同一方向に傾く場合と、正反對に傾く場合と、唯一方の變化のみが生ずる場合とがある。唯一方の變化のみが起るとは、物價(即ち貨幣價值)が動かす

して個々商品の變動する如きを云ふ。物價の騰貴と價格の騰落とが、同時に同方向を指すきは、一般貨物が貨幣價値の低下につれて騰貴しつゝある場合、或る種の商品が供給不足によつて特に騰貴する如きを言ふ。大正七年から九年春へかけての綿糸の如きは其一例である。又下落が同時に起つた例としては、大正十三年春から夏へかけての生糸の下落を挙げ得る。物價の騰落と價格の騰落とが同時に反對の方向を指すとは一般物價が下落に向ひつゝある際、或る種の貨物は供給不足によつて騰貴する如きを言ふ。米麥の如きは作柄の良否によつて、物價騰落の大勢に背馳する場合が尠くない。此點に關する詳しい説明は後に譲る。

貨幣の價値が何故に變動するか云へば、矢張り他の商品と同様に、その需要と供給とが増減するからである。但し貨幣に於ける需要供給の増減は、他の貨物とは幾分其性質を異にするから、上來の説明を其儘應用するわけには往かぬ。仍つてまづ貨幣

の供給の方を述べて、次に其需要に就いて説明する。而して其當然の順序として、金融市場にも説き及ぶことになる。

(三) 貨幣數量説

貨幣の需給關係を述ぶるに先ちて、まづ貨幣と貨物との交換割合を定める根本法則に就いて一言せねばならない。物々交換に於いて貨物と貨物とが、相互に需要供給の關係に立つと同様に、貨幣を仲介とする交換、即ち賣買に在つては、貨幣と貨物とが相互に需要供給の關係に立つ。即ち賣人は貨物を供給して、貨幣を需要するものであり、買人は貨幣を供給して貨物を需要するものである。随つて貨物の供給の總數の増加は、貨幣の需要増加となり、貨幣供給總數の増加は貨物の需要増加となる。反對の場合には或は貨幣需要の減少となり、或は貨物需要の減少となる。随つて貨幣の數量

が増して商品の數量に變化が起らねば、貨幣は下落し、物價はそれに應じて騰貴する貨幣の數量に變化が起らずして、貨物の分量が減つても、同じ結果が起る。處て一國內に於ける貨物の流通量(取引高)は、急激に變化しないのを普通とするから、貨幣の増減は大抵それに比例して物價の騰落を惹起す。されば或る學者は物價の騰落は特殊の場合を除いては、通貨の増減に正比例すると説く。之れを稱して貨幣數量説と云ひ其是非に就いては學者間に可成り議論が多い。

勿論貨幣數量説を執る人にしても、無條件に物價の騰落は、通貨數量の増減に比例するといふのではない。それには、三つの條件を付けてゐる、(一)貨物流通數量が同じであること、(二)貨幣の廻轉數が同じであること、(三)貨幣に代用される手形の貨幣に對する割合に變化が起らない事といふのが、即ちそれである。貨幣の廻轉數とは同じ貨幣が甲から乙、乙から丙、丙から丁といふ風に、授受されて往く速度を云ひ、

貨幣に代用される手形とは、小切手や爲替手形、預金證書の類を云ふ。此種の手形は貨幣の代理を務めて、其使用量を節約させる、随つてそれが盛んに利用される場合には、通貨が増發されたのと同じ結果になるのである。右三つの條件に變化が起らない限り、物價は通貨數量の増減に正比例して、騰落すべき筈である。而して一國一時代に就いて云へば貨物の流通高が急に増減したり、貨幣の廻轉速度が急に變化したり、手形の貨幣に對する割合が急に變動したりすることは、容易に起らないから、通貨數量の増減につれて物價の騰落する場合が多いと唱へられる。此説明は或る程度まで、其儘承認して差支ないが、實際問題として物價の騰落を觀測する場合には、イマ少し詳細に研究する餘地がある。色々の事情が貨幣對貨物の對立狀態を變化させて、兩者の比例を動かすからである。

(四) 貨幣と貨物の對立

我國に於ける過去數十年間の經驗から云ふても、通貨數量の増減と物價騰落の割合は、略ほ一致してゐる。随つて通貨數量説は反對論者の想像するよりは、遙かに高度の確實性を持つてゐるようによに想ふ。併し經濟組織が複雑になるにつれて、一面には貨幣の使用を節約する傾向が強くなり、他方には貨物交換の媒介以外に、貨幣を使用する場合が多くなり、其關係から貨幣對貨物の對立狀態に著しい變化を惹起す。賣買以外に於て貨幣の使用さるゝ主な場合は(一)租税の納入、(二)貸借の決済、(三)銀行の支拂準備、(四)投資金の拂込等であり、貨幣節約の手段は手形の利用、手形交換の發達と、各種取引の帳簿上の決済等である。是等の中で近代の學者が特に問題とするのは、預金を基礎としての手形の利用である。彼等は銀行に於ける當座預金を預金

通貨と稱して、其増減を通貨の増減と同様に見做し、それと通貨を合算したものを通貨の數量と見做す。此點に關する詳細の事は金融關係を論ずる場合に譲らねばならない。其他の點に就いても金融と關聯して説く方が便利である、當今に於いては金融關係を離れて、通貨の増減を説くことは、無意味に歸着するからである。

貨幣供給の内容に右の如き異分子が加はるゝ同様に、貨物の流動狀態も亦必ずしも生産消費の實數とは步調を共にしない。即ち國內に於ける金融狀態、並びに國際間に於ける物價の均衡の動搖は、特殊事情の發生によつて、急激な變動を示す場合がある。歐洲大戰當時の如きは其適例であるが、平時に在つても、久しく固定不動の狀態を繼續する場合は稀れである。されば貨物の移動高は急變するものでないといふ説明も、要するに程度問題に歸着する。何れかと云へば景氣の消長につれて、貨幣と貨物の對立狀態は常に變化するが、それ等の變化を惹起す中樞勢力が、通貨の増減であるとい

ふのが、最も妥當な解釋である。此事は金融市場に關する研究を重ねて往けば自然に判つて來る。

(五) 貨幣流通高の制限

現在に於ける各國の貨幣發行制度は色々であるが、大體に於いて金本位、銀本位又は金銀複本位を採用してをり、發券銀行をしてそれを基礎とする紙幣を發行させ、小額支拂に要する貨幣、即ち補助貨の發行は政府の手で行ふてゐる。それ等の實際を一一々説明することは、此場合餘り必要もないから、單に日本の制度に就いて述べる。日本の貨幣制度は、金本位であつて、純金一匁を五圓とし、而して金貨には銅千分の百を混和してある爲めに五圓金貨は一匁一分一厘一毛一の目方を持つ。尙ほ又其鑄造に當つては千分の一までは、純分の間違を認めることになつる。紙幣の發行は日本銀

行に委託され、金保有高に相當する金額だけは、何時でも發行することを許し、其外に證券を準備(保證準備)とする一億二千萬圓の發行を認許し、尙ほそれ以上を發行する必要がある場合には、大藏省の認可を得て制限外保證準備發行を爲し得ることになつてゐる。此場合には大藏省の指定に従つて五朱乃至八朱の制限外發行税を納付せねばならぬ。普通の紙幣發行にも發行税を課せられてゐるが、それは唯國庫收入を目的としたもので、限外發行税は紙幣の發行を制限する目的で設けられたものである。補助貨は銀貨と銅貨とであつて、政府の手で發行する、現在尙ほ残つてゐる小額紙幣は歐洲戰爭の當時補助貨の代用として發行したもので、銀及銅の價格騰貴によつて、補助貨が鑄造されるのを防ぐ爲め、新補助貨鑄造が間に合はない爲めに、臨機の方法として案出されたものである。補助貨は本位貨よりも其實質的價值を低くして置かない鑄造されたり、外國へ輸出されたりして了ふ。地金として貨幣以上の値打ちを持

つこになるからである。

右の如く日本の貨幣は圓を單位とし、其實質的價值は純金一匁の五分の一である、之れを基本として外國貨幣との比例が決まる。純分比較に於いて英國の磅は九圓七十六錢三厘三毛、米國の弗は二圓六厘二毛に當る。之れが土臺になつて外國との爲替相場が決まるのであるが、此點に就いては後に説明する機會があるであらう。

兎に角各國の紙幣供給高は、其國に於ける準備金銀貨の保有高によつて定まり、それ以上の發行高又はそれに對する一定の比例を超へた發行（比例準備制度の國では紙幣發行高の七割とか、八割とか定めた正貨準備を必要とするに決めてゐる）は、嚴重に制限されてゐる。随つて貨幣の流通高は、任意に増減し得ないのが普通である併し色々の事情から、或る程度の増減は常に繰返され、それが金融及び物價の上に種々の作用を起す、此點も亦金融に就いて述べる場合に説明する。

第四章 金 融

(一) 金融の本質

貨物相互間の比較的價值即ち價格の變動は、需要と供給の變化から起るが、其點に關する説明は後廻しにして、まづ貨幣との比較に於ける變動、即ち物價の騰落に關する説明を進めた方が、便宜でもあり又判り易くもあらうと思ふ。而して物價の騰落を説くに當つては、先づ金融に關する稍や詳細な説明をしなければならぬ。通貨の増減は金融市場の繁閑と、密接離る可からざる因果關係を持つからである。

曩きにも述べた如く貨幣は、貨物交換の媒介として現はれたものである。随つて品物を賣つて貨幣を收得したものは、それを以て自分に必要な他の品物を買うべき筈である。處て貯蓄の習慣が起つて來るに、品物を賣つて受取つた貨幣を將來の必要に備

へる爲に、貯藏する風習が起る。自己の生活に必要である以上に多額の生産をする人が増加するに随つて、此種の貯藏が益増加するわけであるが、併し單に貨幣を貯へてゐたのでは、盜難等の危険があるのみならず、何等生活上の利便を増さない。それ故何ぞかそれを利用することを考へる。それには二つの方法しかない、生活程度を高め若くは生産を増大する爲めに、品物を買ふこと、及び他人に貸與して其何れかの爲めに、品物を買はせることである。後の手段を擇ぶ場合に於いて、金融關係が生ずる。

苟くも貯蓄をする程の人は、妄りに生活程度を高めず、又生活の爲に借金する人に貸與するものも少い。されば貯蓄は大體生産増加の途に用ひらるゝ、即ちそれを生産資本として利用する。而して社會が進歩するにつれて、他人の貯蓄を利用するものが増加し、生産資本を借用せんとするものゝ數が、常に貯蓄の現在額を超過するに及んで借用料としての利子が、重要な經濟現象と見做さるゝに至り、貨幣死藏の傾向は殆

んど已む。斯うなつて來ると一度發行された貨幣は、一日も無用に遊ばせて置かれな
い、自然其發行高の増減は、略ぼ流通高の増減と一致する。此處まで進まなければ貨
幣流通高の中には、往々其死藏さるゝ部分までが含まれることになる。而して然うな
るのには、稍や高度の金融組織が成立たねばならぬ。近代に於ける銀行業の發達は、
金融組織を最高度まで進歩せしめた、随つて特殊の場合を除く外、貨幣の死藏は起ら
ない事になつた。其處で物價の騰落は、殆んど全く金融事情に支配さるゝことになつ
たのである。

(二) 通貨の増減

總ての經濟組織は社會の進歩に伴ふて、自然に發達して來たものであつて、貨幣流
通高の如きも歴史的順序を経て、漸増して來たわけだが、貨幣單位の名稱や本位貨幣

の量目は、屢時の政府の法令等によつて、人爲的に變更された。明治政府が兩を圓に改めた如き、二匁五圓の規定を一匁に變へた如き、其實例である。時としては大戦後に於ける露國や獨逸の如く、正貨を基礎としない紙幣を濫發して、貨幣制度を混亂させる事もある。此の如くにして通貨の分量が人爲的に増減させられる場合にも、物價はそれに應じて變動するが、極端に不換紙幣の濫發が行はれる際の如き、當初は貨幣の回轉數が激増して、紙幣増加の割合以上に物貨を騰貴させるが、遂には紙幣の授受を嫌ふ風を生じて、正貨に對する物價を割安ならしめる。不換紙幣の濫發は戦亂等の結果として現はれる一時的變態であり、經濟學上に於ける特殊の研究項目ではあるが容易に起らない現象であるから、普通の人にとつては、餘り研究する必要もあるまい尤も、現に我國で實行してゐる金の輸出禁止も、兌換制度の部分的停止であつて、それが爲替を正貨輸送點（純分比例に金の現送費を加へたもの）以下に降らしめた場合

には、物價の上に其影響を惹起す。仍つて此點は後に詳しく説明する。

貨幣制度の變更等によつて、人爲的に増減させられる場合を除けば、一國內に於ける通貨の分量は輸出入の差額によつて、自然に調節される。それは一國內の通貨が著しく減少すれば其國の物價が下落し、其結果として貿易は輸出超過になつて外國から正貨を喚込み、反對の場合には物貨が騰貴して貿易は輸入超過になり、正貨を外國へ流出させるからである。但し此作用は金銀の死藏が行はれる場合には發生しない、其流入や流出が必ずしも通貨流通高の増減を惹起さず、随つて國內に於ける物價の騰落をも惹起さないからである。金融組織が完備して、正貨死藏の風習が消滅すれば、此作用は最も完全に行はれる。正貨の増減は直ちに金融の上に反映して、通貨の増減を惹起し、物價を騰落させるからである。此關係を十分に理解すれば、物價の騰落する理由も、貿易に不均衡の起る原因も、能く判る。

姑く國際貿易の關係を除外して考へれば、一國內に於ける物價は、其國に於ける通貨との比例によつて定まる。斯くて鎖國時代の日本の物價は、其當時の通貨と比例を保つてゐたわけである。幕末に至つて通貨の實質を粗惡にして、其流通高を増加した爲めに、物價は漸騰の傾向を示した。假りに大金銀鑛が発見されて、貨幣の増發を來したにしても、同じ結果が起つた筈である。探鑛及び製練法の進歩によつて、金銀の生産費が低下したとしても、矢張同じ結果が起つたであらう、金銀の産額が増加して通貨の増量を促がすからである。是れ等の事實から推せば、金銀の生産費が通貨の増減を支配する根本勢力であつて、自然物價はそれによつて左右さるべきもの、如く見へる。併し現代に在つては、金銀の生産費と物價との關係は、大分に疎隔してゐる。此點も後に詳説する。

(三) 正貨の節約

交換の媒介としての貨幣の一般的使用は、貨幣をして價值代表の機能を持たしめた即ち實質的價值の有無に拘らず、一圓の貨幣は一圓の購買力を持つことになつた。金銀貨の代りに紙幣を用ひた處で、流通高を増さなければ、貨幣の價值は變らない筈である。随つて其發行を嚴重に制限して置きさへすれば、貨幣として使用する品物は、銅であらうと、鐵であらうと、紙であらうと差支ないわけである。理論に於いては正に此の通りである。處が實際は然うは往かない、それには色々の理由がある。第一には其使用者に安心を與へる爲めに、實質的價值ある如き外觀を呈せしめねばならない金の如き貨幣としての使用が已めば、甚しく其價值を失墜する筈であるが、現在の處では貨幣に相當する價格を維持してゐる、使用者は此外觀に満足して安心して貨幣を

授受する、紙幣は何時にても、補助貨は五圓以上になれば、金貨に代へ得るまいふことになつてゐる。第二には外國との交換割合を一定する爲めに、特定の有價物を定めて置くことが便利である、最近金が米國に集中された結果、英國などには爲替を本位とする新制度を創定せんといふ説もあるが、それは米國の金貨を標準とする爲替相場とまいふこととでなければ、意味を成すまいと思ふ。第三には通貨の濫發を防ぎ、其の増減を自然に調節する作用を起さしめる爲めに、外國と共通の貨物を基本として置く必要がある。貨幣の製造費が低廉な場合には財政上の便宜の爲めに、屢發行制限額を改正する虞あり、且つ外國と異なつた貨物を本位とすれば、其貨物の騰落につれて、屢爲替相場の急變が起る、金貨國と銀貨國との間にすら、此不便は可成り著しい。

右の如き理由から、當今では大抵の國が金貨本位制を採用してゐる、而して金礦の探掘は其需要を見込んで行はれ、金の生産費は其貨幣としての價値に近い處まで高め

られてゐる。貨幣としての金の需要が已めば、金の相場が下がるから、不引合の鑛山は廢棄されて、生産費はそれだけ低下する筈である。但し金銀の如きものは、世界に於ける蓄積額が非常に多いものゆへ、二三年間に於ける生産の増減も其供給額に著しい變化を起さない。随つて生産費が價格を調節する力も極めて微弱であり、寧ろ貨幣としての需要の増減が主として價格を調節してゐる。此作用は金融市場を通じて行はれるもので、詳しい事は後に説明する。

貨幣には理論上實質的價値の存在を必要としない、而かも上述の理由から、特定の有價物を背景として置くのが便宜である。其處で各國とも金銀を本位貨として、貨幣價値の本體を一定して置く。けれども實際の取引に金銀貨を使用する事は、色々の不便と不利を伴ふ、五萬圓の金貨は目方十一貫百十一匁で多大の容積を要し、且つ授受の間に磨減したり、故意に削られたりする。是れ等の不便を除くには、何時でも金貨

に換へ得る證券、即ち紙幣を用ゆることが最も好都合である。斯くて今日では世界を通じて金銀貨の使用は、次第に減少しつつある。

楮て紙幣を使用することになると、必ずしも發行高に相當する金銀貨を用意して置かずとも、兌換の要求に應じ得ることが判る。國民が各種の取引に貨幣を必要とする以上、發行したもの、全部に對し、兌換を求めらるゝ場合は、容易に起らないからである。其處で出来るだけ金銀の貯藏を節約する目的で、保證準備發行とか、比例準備發行とかいふ方法が案出された。是等の方法によつて貨幣料は節約される、其効能は金銀の生産費を高めずして、貨幣分量を増加するに在るが、貨幣の發行者から云へば、無準備發行に相當するだけの資金を、無利息で借りてゐるのと同じ事になる。但し保證準備の制定又は増額は、それだけ貨幣價值の騰貴を抑へ、又は其下落を惹起すものであるから、妄りに實行すれば徒らに物價を騰貴させる。次には兌換に差支を生

ずるほどの無準備發行は、通貨の信用を害して、財界の混亂を惹起すから、餘り正貨を節約し過ぎてはならぬ。

(四) 通貨の節約

銀行本來の任務は資本貸借の仲介に在るが、それと相關聯して通貨の節約に就いても多大の効果を擧げてゐる。其作用は小切手の利用、手形の交換、帳簿上の決済等によつて行はれるのであつて、丁度政府が保證發行によつて、正貨を節約するのと同じように、それ等によつて通貨の使用を省略する。随つて此種の信用取引が發達すればするほぎ、一國に於ける貨幣の流通高は少額で済む筈であるが、實際を云へば信用の發達によつて、國內に於ける通貨の分量が減つた例はなく、寧ろ其反對に通貨の増量が基調となつて信用取引が擴大され、其結果として益通貨の需要を増大する。之れが

近代經濟社會の最も著しい特色であつて、其意味を十分に了解しないと金融と物價との關係が、明瞭にならない。

貨幣は價値を代表する、随つて其所有はそれに相當する富の所有を意味する、それ故誰でも皆成るべく多額の貨幣所有者にならうとする。之れが貨幣に對して現はれる第一次の心理作用である。處て貨幣の所有は唯それ丈では何等生活上の利便を増さない、之れを貨物に代へるか、利殖の途を講ずるかせねば其の効用を發揮しない。それ故自己の所有に歸した貨幣は、成るべく之れを活用しようとする。之れが貨幣に對して現はれる第二次の心理作用である。斯様に貨幣を活用すれば、自己の必要とする何物をも購入することが出來て、生活の充實若くは生産の擴張を圖ることが出來る。それ故貨幣が一旦自己の所有に歸した場合には、成るべくそれを有効に利用しようとする。之れが貨幣に對して現はれる第三次の心理作用である。

第一次の心理作用によつて、多くの人は生活剩餘即ち貯蓄を金に換へようとする、第二次の心理作用によつて、貯蓄を資本又は預金にする、第三次の心理作用によつて資本又は預金の効用を、高度に發揮させようとする。資本の効用を高める爲めには、其回轉速度を増さしめねばならない。其處て貨幣を其儘の形で營業資本として運用する銀行は、其回轉速度を増させる目的で、手形をして貨幣の代理を務めさせる。假りに百萬圓の現金を用意して置けば、五百萬圓の取引が圓滑に行はれて往くとせんか、銀行は其取引を成るべく五百萬圓程度に擴張しようとする、斯様にして所謂信用の擴張が行はれるのである。換言すれば手形は貨幣の影武者として利用されるのであるから、本來は通貨の増發を基本として發生するものであり、まづ手形が發行されて、通貨の需要を起すといふことは、之れ有るまじき筈である。處が貸借關係が複雑になつて來るに、尠くも然ういふ外觀を呈することがある。此事は後に詳しく説明する。

(五) 通貨と手形の割合

紙幣發行に於いて比例準備と稱するのは、紙幣發行高の七割とか八割とかの、正貨を準備して置けば、差支ないといふ制度である。その位の正貨があれば、兌換に差支ないといふので、此制度が採用されてゐるのである。之れと同じ意味に於いて、銀行の取引に在つても、預金に對して準備すべき現金は全額に對する一割か一割五分で足りる。其處で百萬圓の現金を用意してゐる銀行は、その七倍乃至十倍の預金があつても、何等の不安を感じない。其處で銀行經營者はそれを標準にして資金の運用を圖る假りに預金準備の標準を一割と見、一千萬圓の預金に對して、二百萬圓の現金があるとする、其場合には更に百萬圓を貸出さうとする。而かもそれを借りたものは直ちに全額の通貨を必要としないから、それを預金帳に記入して貰ふて、必要に應じて小切

手を振出す、其結果預金が千百萬圓になつても、手許金は減らず、唯準備割合が二割から一割八分一厘八毛に降るのみである。(貸出金が他の銀行へ預入されても市場全體に對する影響は同じである。)斯くて現金百萬圓の増加は、預金と貸出を一千萬圓増加させる事に歸着する。併し金融市場全體を通じて此の如き信用の膨脹が起れば、其結果物價貸銀の騰貴を惹起して貨幣の市中流通高を増させるから、それにつれて銀行の手許金を減じ、實際は右のように單純には往かない。此點は事實に就いて説明する方が判り易いから、後に譲り、今は唯貨幣の増發につれて、手形流通高の増加する事實に就いて述べる。

上述の如き關係から貨幣が増發されるにつれて、手形の流通高はその五倍とか七倍とかいふ割合で殖へて行く。その割合は時によつても相違し、國によつても相違するが、一國一時代に在つては、自然に一定せる割合があつて、急激な變化を許さないも

のである。蓋し一國一時代に於いて各種の取引に手形を利用し得る程度に其決済方法は、習慣によつて自然に發達するものであつて、急激にそれを變更することは、不可能だからである。但し特殊の事情によつて、決済準備貨幣と手形流通高との割合が急に變化することがある。その場合には必ずその反動を惹起して、従前の割合に復歸せしめようとする。大正八年から十年に至る間に於いて、其適例が現はれてゐる。

普通の場合に於いては、決済準備通貨と手形流通高との割合が、略ぼ一定してゐるから、信用の伸縮は大體に於いて貨幣の増減に順應するものと見做して差支ない。貨幣數量論の重要視される一つの理由は、其處に在る。而して貿易の順逆が國內の景氣の消長に、至大の關係を持つ所以も亦其處に在る。此點も後に詳しく説明する。

第五章 物價の騰落

(一) 物價變動の原動力

物價の騰貴は貨幣の下落を意味し、其下落は貨幣の騰貴を意味する、即ち貨幣價値と物價とは、桿杆の兩端に懸つてゐる物體と同じように、同時に上り下りするものである。随つて双方の變動に前後の差はあり得ない筈であるが、まづ右へ力が加へられるか、左へ加へられるかの相違は起り得るわけである。例へば國內に於ける通貨の分量に變化が起らず、單に貨物のみが増減する場合を假想することは、決して不合理ではない。鎖國時代に凶作によつて米の收穫高が減れば、然ういふ結果を生ずる。歐洲戦争によつて我國の輸入が減り、輸出が殖へたときにも、其實例が起つたわけである。斯かる場合にはまづ貨物の在高が減つて、それが貨幣價値の低下を惹起したまゝいふこ

とが出来る。併し此場合に於ける物價の騰貴を、左程單純に片付けて了ふわけには往かない。

貨物在高の減少が同時に其取引高の減少を惹起すならば、其仲介に用ひらるゝ貨幣の分量も、銀行の手を通じて同時に減少すべき筈である。不景氣時代に取り引の減少から、生産規模の縮小を惹起す場合には、然ういふ現象が現はれる。併し凶作による米の供給減少も、歐洲戦争による輸出増輸入減少の場合には、必ずしも貨物の取引高は減らず、寧ろ其回轉速度が増して、通貨の需要を増大するのを普通とする。貨物回轉速度の増大は、必然的に其價格の騰貴を促すからである。其手續きを簡單に説明すれば凶作の爲めに米の在高は減る、併し米に對する慾望は變らない、それ故減少した米に對して從來と同じ購買力が提供される。假りに農家の自家用を除いた供給高四千萬石に對して、十二億圓の購買力が働くとせんに、一石平均價格は三十圓になる

供給が三千萬石になつたとき、同じ力が働くとすれば、一石當りは四十圓になる。而かも四十圓の相場でも尙ほ賣物を喚出し得なければ、從來他の貨物に向けられた購買力を、米に振り向ける場合も起る。若しその高が三億圓に上るならば、三千萬石に對して十五億圓提供されるから、一石當りは五十圓になる。斯くて米の如き生活必需品に供給の減少が起つても、通貨の減少は起らず、寧ろ其價格の上進を中心として、賣買が盛んに行はれるから、通貨の需要を増加する傾向を持つ。而してその場合通貨が増發されないならば、米の上がる反對に他の品物が下つて、物價を元の位地に置く。購買力が米に偏傾して、他の貨物から去つて了ふ爲めである。

次に輸出増輸入減の場合には、各種の貨物に對する慾望は變化せず、購買力は外國よりの正貨流入に由る通貨増發によつて却つて増加する傾向を示すから、當然物價を騰貴させる。けれど若し銀行が輸出代金を預入されて、それを日本銀行へ預けて置く

とか、外國へ投資するに可すれば、然ういふ作用は起らない。貨物の減少と同時に通貨が増加したればこそ、歐洲大戦中及び戦後の物價騰貴は起つたのである。それとは反對に九年の反動後には、在荷が減つても物價は上らなかつた、銀行が貸出を回収して、日本銀行からの借入金を返済したからである。斯様に考へて來ると、貨物在高の増減は、必ずしも物價の上反映せず、其場合に起る通貨の増減が物價を支配するにいふに歸着する。

市場に於ける通貨の分量は、財政上に急激な變化が起らない限り、銀行の態度如何によつて決定される、之れは物價問題を研究する上に於いて、常に記憶して置かねばならぬ要點である。但し我國に在つは、過去六十年間に亘つて常に財政上に變化が起つて、絶へず金融市場に多大の影響を與へた。外國にも多少同様の事實が起つてゐるが日本ほど甚しくはない。大戦開始後に於ける歐洲諸國の歴史はその例外を見做すべ

まであつて、南北戦争開始後の米國のそれも同様である。

(二) 金融の緩和と緊縮

姑く財政との關係を別問題とすれば、金融市場の一張一弛は、一般財界の景氣の消長と互に因果關係に立ち、一定の順序を履んで變化する。而してそれが通貨の増減を支配する主要原因となる。されば此關係を離れて、物價の騰落を説くことは、全く不可能である。併し此點を中心にして説明を進めて行くことは、初學者にとつては六ヶし過ぎるから、最初はイマ少し簡単な説明方法を用ゆることにしよう。

金融の自然的調節作用を離れて云へば、一國の貨幣は三つの方法によつて増加される、第一は國內金産額の増加、第二は貿易の出超に由る金銀の流入、第三は無準備發行の増加である。その何れの場合が起つても、銀行の決済準備金が増加するから、

金融が緩んで来る。之れが金融の緩む最も判り易い場合である。その反対に金産額の減少、正貨の流出、無準備発行の縮少は、金融を引緊める。金産額の増加が、世界的に金融を緩和させた一例としては、十九世紀末に於ける南阿金産の開発に伴ふ低利時代を挙げ得られる。正貨流入に由る金融の緩和は、大正四五年に於ける我國の實例が今尚ほ世人の記憶に残つてゐる。無準備発行に由る金融の緩和は、取り付け騒ぎの起る度毎に日本銀行が繰返して行ふ慣用手段である。その反対の場合としては、(一)米國へ金が集まつた結果としての歐洲の金利高、(二)最近に於ける我國の高金利、(三)日本銀行の貸出引締めによる金融の緊縮等の例を挙げることが出来る。斯くて一般的原則として、資金の需要に變化が起らないならば、通貨の供給増加は金融を緩和させ其減少は金融を緊縮させるといふことを肯定することが出来る。而かも實際に於ける金融の張弛は、資金需要の増減に伴ふ場合の方が、遙かに頻繁なのである。

資金の需要とは生産販賣資本としての、貨幣の需要を指すのである。生産規模が擴大し、取引高が増加するときには、それに伴れて資本としての通貨の需要を増大し、反対の場合には資本としての通貨の需要が減る、之れを稱して資金需要の増減と云ふ。それは景氣の消長に随伴して起るとも云へるし、又それが景氣の盛衰を惹起すのだとも云へる。要するに資金需要の増減と景氣の消長とは、離る可からざる因果關係を有するもので、随つて景氣の消長を度外して、金融の繁閑を説くことは出来ないのである。偶金産額の増減、貨幣制度の變化、其他の特殊事情によつて、景氣循環の徑路に相伴はざる金融の弛張を惹起すことがあるが、それ等是一種の例外として取扱はるべきものである。然らば景氣の盛衰は如何にして起り、而してそれが資金の需要にどう響くか、此處で此問題を詳細に述べるのは、説明の順序として少し早過ぎるから、後に譲り、此處では通貨供給の増減を基調としての金融の弛張から、物價の變動する徑

路を説明し、景氣循環の問題は、將來に保留して置く。

(三) 通貨の膨脹に由る物價騰貴

單純に貨物取引高の減少から、通貨の收縮を惹起して、物價の低落を促がす如きことは、極めて稀有であつて、外見上さう考へらるゝ場合、即ち不景氣に伴ふ物價の下落でも、實は金融事情に餘儀なくされるのである。蓋し人類の消費慾が常に満足されない状態に在るのみならず、其活動慾も亦資本の供給に制限がある爲めに、常に満足されてゐないから、金融事情さへ許すならば多くの人は借金によつて、購買力を作出さうとする。斯くして物價の騰落を惹起す中心勢力は、通貨の増減即ち金融市場の勢に在りし云ひ得られるのである。現代に於いて諸市場に對する通貨の供給を支配するものは銀行であるから、銀行を除外して通貨の増減を考へることは出来ない。而か

も所謂預金通貨を作り出す爲めには、其基本として其何分の一かの現金準備を要求するから、銀行の態度を決せしめる根本動機は、預金準備の増減である。

銀行に於ける預金準備の増加は他動的には通貨の増發によつて起され、自動的には貸出金の回収によつて誘致される。貿易の出超、國庫金の支拂超過等による準備率の増加は、前の例であつて、現金預入の増加が準備率を高めるのである。貸出の回収に由る準備率増大は、市場に流通してゐる貨幣を、徐々に銀行の庫中に引揚げることによつて行はれる。此種の作用の行はれてゐる間、物價は次第に下落して取引高は收縮し、その結果不景氣時代を現出させる。而して銀行の準備金が、必要と考へる以上に多くなれば、金融は緩慢に傾き、銀行は貸出を増加させるに努めるから、其處で通貨増發、信用膨脹の傾向が現はれて來る。其場合には丁度貸出回収時代と正反對の現象が起つて、所謂好景氣時代を現出させる。現代の經濟社會に絶へず此の如き波動を繰

返しつゝ、其間に産業の進化が行はれ、個人間に於ける富の分布状態が變つて往く。此作用を度外視して經濟關係を説明することは、不可能である。交換も生産も分配も消費も皆其影響を被るからである。

金融が緩んで金利が下り、銀行が進んで貸出すようになれば、商工業に従事してゐるものは、景氣の回復にそれに伴ふ購買力の増加を見越して、徐々に其事業を擴張する。事業の擴張は物資の需要を増加させるから、景氣振興の過程はそれによつて益促進される。此種の物資需要は、金融の繁閑につれて甚しく動搖するものであつて、平常状態に於ける生活用財の需要とは、區別せねばならぬものである。其處で學者は前者を生産財、後者を消費財と唱へる。通例消費財の需要には、急激な變化は起らないが、生産財の需要は景氣の消長につれて、甚しく増減する。通貨が膨脹するにつれて物價が騰貴する時期に於いて、生産財の需要は最も旺盛であり、その結果が益通貨の

需要を増大して、遂には(一)預金準備の過少、(二)正貨準備の不足、(三)信用の動搖等を惹起して反動を招き、甚しきに至れば乃ち恐慌を招來する。是等の點に就いては後に詳しく説明すべく、茲では單に『通貨の増加につれて物價は騰貴する、通貨が收縮すれば物價は下落する、随つて同じ生産費を要した品物でも、必ずしも同一の市價で販賣されるものでない』といふ、一般的法則を承認して貰へば足りる。此原則を記憶して置かないと、生産及分配に關する諸問題を、正當に理解することが出来ない。

(四) 物價と國際貿易

同一貨物は同一市場に在つては、常に同一市價を保つといふのが、交換價値に附隨せる最も重要な一原則である。處て同一市場といふ言葉は、狭く見れば一地方の事になり、廣くすれば全世界を包括することになる。當今では尠くも一國內は同一市場と

見做して差支なく、唯重量の多い貨物に至つては、時として運賃の差が相場に影響する。石炭、木材の如きは即ち其例であるが、それは唯同じ値段に運賃が加はるといふに過ぎない。然るに國際間の相場には、更に他の要素が加はつて、値開きを擴大させる。其第一は關稅であり、第二は爲替相場であり、第三は種々の人爲的制限、例へば消費稅、販賣協定、輸出獎勵金交付等の影響である。是等は國內に於ける運賃と同様に、諸貨物の國際間の市價を不均一ならしめるが、その影響を取去つて見れば、正當の市價は矢張り同一水準に歸着するのである。賣手が成るべく高く賣らうとし、買手が成るべく安く買はうとする以上、國際間の相場にも二種あることは許されない。

關稅とか輸出獎勵金とかいふものは、人爲的に改廢さるべきもので、經濟界自然の法則に支配されるものでない。随つてそれは政策問題としては、重要なものであるが經濟界に於ける自然の法則とは没交渉である。獨り爲替の騰落は物價の國際的均衡を

維持せしめんとする自然的調節作用であつて、國內に於ける金融の繁閑と同様に、物價の騰落と離る可からざる關係を持つ。

貨物はその性質上安い處から高い處へ流れる、随つて日本の物價が外國のそれよりも安ければ、日本の品物は外國へ輸出されて、外國からは正貨が流れ込んで來て通貨を膨脹させ、結局日本の物價を外國と同じ處まで高める。日本の物價が割高であれば丁度正反對の現象が起つて、外國と釣合ふ處まで低落する。正貨の輸出入に何等の制限がないならば、此作用は極めて圓滑に行はれて、物價の國際的均衡を維持せしめる當今の如く正貨の輸出を法律によつて制限してゐる場合には、その作用が行はれない爲めに、爲替相場に不自然な變動が起つて、それによつて物價の平準を保たせようとする。

國際間の爲替相場は平常の状態(正貨の輸出入に制限のない場合)に在つては、正貨

の輸送費に相當する範圍内に於いて騰落する。例へば日本の貿易が輸出超過になつて外國から支拂を受けるようになれば、外國人は最初は圓爲替でそれを拂はうとして、圓爲替を買うから圓貨の値段が高くなる。併し圓貨が其含有する純分量に正貨の輸送費(普通正貨價格の千分の十以下)を加へたものより高くなれば、爲替で拂ふよりは正貨で決済する方が利益だから、直接金を輸送する。貿易が入超になつて、外國へ支拂ふ場合には圓爲替は下落するが、上記の正貨輸送點以下になれば、金を送つた方が利益だから、日本銀行から正貨を兌換して貰つて、それを外國へ送る。随つて斯ういふ状態の下に於いては、爲替は正貨輸送費の以上にも高まらず、輸送點以下にも下らないのである。そして正貨の流入する場合には、それに伴ふ通貨の膨脹によつて、國內の物價を高めて外國と釣合はせ、流出の場合には通貨の收縮によつて國內の物價を低めて外國と釣合はせる。國際貿易は此の如くにして、一國內に於ける正貨の過不足

を調節する。

處が當今の如く正貨の輸出を制限されると、此自然作用が行はれないから、爲替が正貨輸送點以下に降つて、國內の物價は下らずとも、外國に於ける圓の値打が下るから、物價が下つたと同じ事になる。例へば國內で一圓してゐる品物も、圓貨が二割下れば、外國貨幣に對しては、八十錢になつたと同じである。自然それにつれて輸出が殖へ、輸入が減つて、正貨を輸送したと同じ結果を生ずる。併し此場合には國內の通貨が減らないから、信用の收縮が急速に行はれず、正貨を現送するほかに適切に貿易の不權衡を調節せず、近年に於ける歐洲諸國の如く、何處までも爲替を下落させる事がある。斯ういふ複雑な問題は、他の現象と關聯して説かないとよく判らないから後に譲り、茲では唯物價は國際間に於いても、常に水準を保つ傾向あることを、一言して置くに止める。

第六章 價格の變動

(一) 効用價值と交換價值

物價の變動は貨幣と貨物との關係から起り、特殊商品價格の變動は、貨物と貨物との關係から起る。而かも實際社會に於いては、貨幣價值が常に動搖して、それが貨物相互間の關係に影響を與へるから、物價の騰落と價格の變動とを、分明に區分することは至難である。物價の變動が起らないといふ假定の下に、價格の騰落を説くのは、溫度の昇降を無視して、動植物の分布を説くようなものである。草木の葉は夏は繁茂して冬は凋落する。或る種の貨物はそれと同じように景氣の消長につれて、需給状態に變化を惹起す、随つて需給の構成には常に物價騰落の反映が宿つてゐる。併し此問題の解説は、初學者に於いては餘り複雑過ぎる。姑く後廻はしにして、最初は單純に

貨物の需給が増減することを假想して、それに伴ふ價格の變動を説明する。

景氣の消長を除外して考へるに、貨物に對する需要は秩序的に變化するもので、急激に變ることは尠い、供給の方は天候や不時の災害等によつて急變するところがある。それ故商品價格は、其結果として屢急變する。凶作の爲に農産物の騰貴すること、大漁の爲めに鮮魚の暴落すること、工場の焼失破損によつて、其處で製作される品物の暴騰すること、新礦山の發見によつて礦物市價の急落すること等は、何人も常に經驗する處である。斯ういふ場合には、その生産販賣に従事してゐる人は、常に豫期せざる損失を被り又は利益を享ける。併し是れ等の不可抗力による價格の變動は、經濟學の上に於いては、特殊の例外として論議さるべきもので、原則としては需要と供給とは、資本と勞力の移轉作用によつて常に適合すべき傾向を持つものを見做される。而かも實際に於いては、需要と供給とは、絶えず變動して、一瞬間も靜止してはゐない

その爲めに商品價格も常に動搖する。それに伴ふ種々の現象を研究することが、經濟學の重要任務の一である。

貨物を供給するものは其生産者である、随つて供給の研究は即ち生産の研究といふことになる。貨物を需要するものは、其消費者である、随つて需要の研究は消費の研究に外ならない。社會關係が成立つてゐないときには、生産は自己の要求を基礎として行はれたわけゆへ、生産と消費とは常に相一致し需給の不適合は無かつた云ひ得られる。社會關係が成立して交換が行はれるに及んで、總ての生産者は他人の要求を忖度して、生産に従事するから、往々にして喰違ひが起る。此喰違ひが起れば比較的必要なものを生産せずして、 unnecessary なものを作つた事になる。價格の變動はその間違を修正して、各生産者をして自然に社會に最も欲求する品物を造らせる作用をする。社會の餘り要求しない品物を造れば、供給過剰を惹起して價格を下落させ、生産費を

償ふことが出来ないから、その生産者はそれよりも社會の要求が強い他の貨物を造る或る貨物が供給不足によつて、著しく騰貴すればそれを生産することが利益であるから、多くの人がそれを造る。斯くて供給過剰の品物の生産は減り、供給不足の品物の生産は増加して、供給をして需要に適合させる。生産及び販賣上の競争が支障なく行はれ、資本及び勞力の移轉が絶對に自由であるならば、此法則は總ての貨物をして常に生産費に接近する傾向を持たしめる。實際に於いては久しい間、供給の過不足の繼續することを何人も知つてゐる、其詳細の理由は後に記す。

生産者が、社會が何物を要求するかを觀測するに當つては、右の如く價格の變動を標準にする。随つて其生産費に比較して、より多くの代價を支拂はるゝものほゞ、生産者を誘致する。斯くて現代に於ける生産は交換價值の創造を目的とする事に歸着する。されば人生に對する効用の高い品物でも、其交換價值が生産費を償はない場合に

は、生産額を減じ、社会全體から見れば比較的効用の低い品物でも、交換価値の有利なものゝ生産額を増す。社会の一部には極めて低廉な日用品すら、思ふ様に買ひ得ない人があるのに、多くの人はダイヤモンドか、一反三四百圓もする織物かゝの製作に從事してゐる。之れは富の分布が不均一である結果、購買力の分布が、必ずしも各種貨物の人生に對する効用の多少に比例しない爲めである。

多くの經濟學者は、貨物の人生に對する効用に附隨する價值を、効用價值と呼ぶ。人類が生産に從事する本來の目的は、此種効用價值の創造であつたのであるが、交換の發達と富の不平均の増大に伴れて、次第に交換價值の創造を生産の目的とするに至つた。併し需要者の心持ちでは、常に効用價值の高いものを選択してゐるわけである。効用漸減の法則によつて、富の集積につれて、次第に高級の品物を欲求することになるからである。財産私有制度の可否を論ずるに當つては、之れが私有制度非難の

最大要點になる。それに就いては何れ後に詳説する機會があるであらう。

(二) 生産者の見込違

上述の如く現代の生産は交換價值の創造を目的とするものであるから、總ての人が成るべく需要が多く、供給の尠いものを造らうとする。その結果として需要と供給とは、大體に於いて一致する傾向を示すが、時として生産者が供給の觀測を謬まつて、或る品物を社会の需要する以上に生産することがある。それを稱して、其品物が供給過剰に陥つたといふのであるが、曩きにも記す如く人類の慾望は無限であり、而かもそれが購買力に制限されて、常に十分に満足されてゐない状態に在るから、如何なる品物にもせよ、絶對的に過剰になることはないのである。鮮魚の如く効用漸減の限界が狭く、且つ貯藏の困難なものですら、若し之れを肥料として使用するならば、需要

は數倍又は數十倍する可能性を持つ。而かも然うするには、鮮魚の價格を數十分の一又は數百分の一に引下げねばならない。その場合に大漁續きでも、漁業の所得はそれによつて労働者の生計を維持するに足らなくなるから、漁夫が他の職業に轉じて鮮魚の供給を減少させる。斯かる自然調節作用を起させる爲めには、一度は供給過剰を惹起して、價格を下落せしめねばならない。如何なる商品の生産者でも、屢々此の如き場合に遭遇しないものはない。之れは交換の反覆を前提とする分業的生産組織を基礎とせる現代社會に於いては、免がれ難い運命であつて、恒久的に需給適合の状態を示す社會は、理論上有り得ないことである。

假りに今日全く新しい品物が造り出されて、それが社會の嗜好に投じて、生産費よりも遙かに高く賣れるとする、多數の人は其生産者の眞似をして、類似の品物を製作する。此種の運動はその品物が生産費以下に低落する時までは已まない、その生産者

が現實に損失を経験するまでは、利益があるといふ誘惑が繼續するからである。此點に於いて總ての生産者は、極度まで人類の模倣性を發揮するものである。其最も著しい例は、屢々投機的賣買の上に現はれる、此點は後に詳説する。

最も強く需給適合の傾向を示すものは、需要に彈力の乏しい、そして長い期間に亘つて需要供給の統計が完備してゐる貨物である。我國の米の如きは、不可抗力による供給の増減が頻繁であるに拘らず、甚しい供給の過不足を來すことが少い。國內現存高に多大の増減の起ることはあつても、市場供給高は生産者及び商人の貯藏行爲によつて調節される。一特的過剰商品の貯藏は、生産の變態であつて、之れが行はれる爲めに、供給過剰に由る市價の低落は支へられ、若くはそれによつて不可抗力、又は生産者の見込違に由る供給不足に伴ふ市價の騰貴が緩和される。此事實を稱して思惑に由る市價の調節といふ。此調節が行はれる程度は、一般的には金融の繁閑によつて相

違し、特殊の商品に在つては、其將來に於ける需給増減に伴ふ市價騰落の見込によつて相違する。思惑の一般的増減は、景氣循環の一大要因であつて、其説明は後に譲らねばならぬ。仍つて此處では差當り思惑に由る價格の調節だけを説明する。

(三) 思惑に由る調節

交換を前提とする現代の經濟社會に在つては、總ての貨物を通じて、常に若干の在荷を必要とする、それなしには生産を圓滑に繼續することも出來ず、交換を圓滑に行させることも出來ない。随つて需給の適合といふのは、精確に云へば此種の在荷の過不足を指すのであつて、絶對的供給不足は殆んど起らず、絶對的供給過剩も殆んど起り得ないのである。

生産及び分配を圓滑に繼續させるに必要な在荷は、何を標準にして決められるか此

問題を詳説せんと思すれば、再び金融關係に立入らねばならぬ。併しそれでは問題が複雑になり過ぎるから、姑く景氣の循環と金融の繁閑とは異なるものとして一種の靜止的社會を假想する。然ういふ社會に在つても、總ての貨物の在高は、常に増減する、季節關係に基く農産物在荷の増減の如きは其著例である。米の如きは一年一度の收穫であるから、收穫時には一ヶ年分なければならず、端境には極めて僅少で足りるが、それでも各人の家庭には、日常の習慣に依る一定の貯へが必要であり、小賣商は尠くも數日間の注文に應ずるだけ持つてをらねばならず、問屋も全く品切れにするわけに往かず、¹⁾精米所にも農家にも若干の原料が必要であり、其上に輸送の途上に在るものも相當多額に上るのを普通とする。此内家庭に在るものを消費に伴ふ在荷とし、精米所及農家に在るものを生産に必要な在荷とし、其他を交換に必要な在荷とする。毎日生産される貨物でも全く此種の在荷を無くすわけには往かない、綿糸や麥酒の如き生産

季節のないものでも、需要の豫想される限り、或る程度の在荷は、必要である。されば供給過剰はそれが必要以上に多い場合を云ひ、供給不足はそれが必要額以下に減少した場合を云ふ。需要の豫想し得ない品物には、供給の絶對的過不足が起る、例へば餘りに精巧な織物は、唯一反しかなくとも買手のないことがあり、最上等の自動車に對し五六臺の需要が起つても、一臺の在荷すら無いこともある。是れは右の原則に對する例外であつて、通例の場合には必要的在荷の相對的過不足を指すのである。

但し社會には需要供給の一般的法則の當て筈らない貨物がある、古代美術品の如きはそれであり、類似品のない特許品の如きも亦それである。古代美術品の如きは生産費理論の適用範圍外に在つて、其価格は買方の競争によつて決まる、學者は之れを稀少價値と呼ぶ。類似品のない特許品は、買方の競争を目安とした生産者の打算によつて、其価格が決まる、學者は之れを獨占價値と呼ぶ。絶對に類似のない貨物は、殆ん

ど有り得ないから、絶對的獨占價値と稱すべきものも殆んど有り得ない、随つて實際問題として起るのは、準獨占價値の問題であつて、それは可成り頻發する事柄であるから、後に其の説明をする。

偕て前に戻つて供給の過不足は、畢竟必要在荷の過不足だといふ事にする、その結果はさうなるか、既に在荷といふ以上、それは生産者と、販賣者と、消費者の手に分布されてゐるものである。供給の過不足に就いて、最も鋭敏に頭腦を働かすものは販賣者である、随つてまづ價格の變動を惹起す作用を作り出すものは、概ね、商人である。商人は或る貨物の供給が不足してゐるに想へば、將來に於ける價格の騰貴を見越して其持荷を増加する。そして供給不足の傾向を益顯著ならしめて、その價格を騰貴させる。生産者はそれに刺戟されて、次第に其生産高を増加するが、價格の騰貴してゐる間は、賣却を急がず、その手持を増大する。それによつて長い間價格が騰貴の

一方に傾けば、消費者までが買溜めをするようになって、益在荷を増加させ、結局供給過剰に陥る處まで進む。その反對に供給過剰と断定された場合には、商人は將來に於ける價格の下落を見越して、其持荷を減少するに努め、それによつて供給過剰を益顯著ならしめて、其價格を下落させる。生産者はそれに驚いて生産高を減少し、且つ出来る丈け手持を尠くする、而して然ういふ際には、消費者は急がないほぎ安く買へるこいふので、買控へる傾向を示す。此の如くにして在荷は甚しく減少して、遂には供給不足に陥る。之れは價格の騰落によつて、供給を増減させる普通の方法である。

處が現在は供給不足でも、將來は需要の減少又は生産の増加によつて、供給が潤澤になるこ豫想する場合には、商人は出来る丈け持荷を賣却して、價格の騰貴を緩和し現在供給過剰でも將來は生産の減少又は需要の増加によつて、供給が不十分になるこ豫想する場合には、商人は必要以上に持荷を増大して價格の下落を緩和する。此場合

には一時的需給の過不足が販賣者手持の増減によつて調節されて、市價の變動が緩和される。之れを稱して思惑に由る市價の調節といふ。斯かる行爲は貨幣又は貨物の交換價値の増大を目的として行はれるので、交換に依る價値増大の一形式である。

(四) 交換に由る價値の増大

前にも記せる如く現代に於ける生産は交換價値の創造を目的として行はれる、此意味に於いて貨物の交換も亦一種の生産と見做すことが出来る。普通に生産と稱せられるのは、勞力によつて天然物の形を變へ、若くは所在を變更することによつて、交換價値を作り出すのを云ふが、交換はそれと異なつた形式に於いて、既に生産された貨物を更に有効に利用して、交換價値の増大を圖るものである。其方法は二つに區分する事が出来る、一つは貨物の空間的移動に依るものであり、他の一つは其時間的延長

に依るものである。空間的移動に依る價格の増加は、或る貨物を比較的慾求の多い人から買取つて、比較的慾求の多い人に賣ることであり、時間的延長に依る價格の増大は、或る貨物を比較的潤澤な時に買取つて、比較的缺乏してゐる時に賣ることである。世人は一般に前の機能を商人の職務と見做し、後の機能を投機的行爲と稱するが第一の職務には必然的に第二の職分が包含されてをり、それが投機と稱せられるのは必要以上に仕入れ品を持つか、賣却時間を延長する場合に限られる。即ち仕入高及び手持期間の程度問題に過ぎないのである。此點に就いても、後に詳しく説明する機會があらう。

商人は常に貨物賣買の時間的相違によつて利益を収める機會を覗ふてゐる。されば或る貨物が一時的供給過剩に陥つて、生産費以下に降つた際には、將來必ず起るべき供給の減少を見越して、その手持を増加して過度の値下りを調節する。此場合に於い

て打算の基礎を成すものは、將來に於ける價格騰貴の豫想である。其豫想は何によつて立てられるかと云へば、將來それと同じ品物を造る費用、即ち所謂再生産費である而して斯かる際には生産者自身も亦、資力の許す程度に於いて、商人と同じように其製品の賣却を手控へて持荷を増加し、他方には新規の生産を手控へるこゝによつて、成るべく早く持荷を有利に賣却しようと圖る。即ち再生産費を標準とする價格の維持に就いては、商人と生産者とは互に相協力する。一時的供給不足の場合には、之れを正反對の事が行はれて、市價が甚しく再生産費以上に昇ることを阻止する。斯かる調節作用が行はれるから、總ての貨物の市價は需要と供給の相互的競争によつて、絶えず動搖するが、常に再生産費に復歸せんとする傾向を示すのである。

併し此原則は可成り曖昧なものである、云ふのは、色々の理由から、再生産費に對する人々の見込が違ふからである。單に一國內丈けに就いて云ふも、將來の生産費

は(一)産業組織の改善進歩により、(二)原料天産物の不可抗力による増減により、(三)貨幣価値の断へざる變動により、精確に豫測し難い。その上に外國に於ける同様の變化から、生産費の國際的標準が變つて來ることもある。斯くて市價變動の中心點を稱せらるゝ再生産費も、實際は絶へず動搖してゐるのである。而して斯様に市價決定の中心點が常に變化する爲めに、商人は常に價格の場處的相違、並に時間的相違を洞察して、敏活に價格平準化作用に於ける、自己の職責を果さねばならぬのである。自然商人は時として生産者との正反對の行動を執り、特殊貨物の市價をして、一地方に於ける再生産費を益隔離せしむることもある。例へば日本では綿織物が再生産費以下に降つてゐるのに、外國に於ける其低落を見越して、引續いて持荷減少の手段に出づる如きである。

(五) 豫想と眞實

財産私有制度の一缺陷として、一部の學者は現代に於ける生産が、各個人の空漠たる豫想の下に行はれてゐることを擧げる。此主張が正しいかどうかは疑問であるが、分業組織の下に在つては、如何なる制度を採用するにもせよ、需要を豫想して生産する外に、産業の分布を決定する方法はあるまい。随つて供給に過不足の起るのは、已むを得ない次第である。併し經濟行爲に参加する總ての人は、鋭敏に其營利本能を働かしてゐるのであるから、豫想と實際とが甚しく疎隔することは、有り得ない筈なのである。而かも時としては生産者が全然見當違の方向に集中するところがある、それは概ね需要の方面に急激な變化が起り、若くは起るものと豫想される場合である。例へば歐洲戰亂中に於いて、我國に造船及び製鐵業が勃興した如きは、其著例とすること

が出来る。而かも若し其等事業に於ける資本と勞力とが、何等の支障なしに他の仕事に移動し得るならば、其餘殃が長く残存することはないのである。曩きにも記せる如く、資本及勞力の移動は、一般に想像されるよりも困難なものである。それ故生産者と商人とが、同じような見込違に陥つた場合には、或る種貨物の生産は、久しい間生産費を償ひ得ないことがある。斯かる事實があるからと云ふて、上來述べた價格に關する理論が、間違ふてゐるわけではない。此點に關しては生産及び分配に就いて説明する際に、詳しく述べるが、時として單に商人の見込違から、或る種貨物の市價が長い間生産費以下に降つてゐることもある。之れは思惑に由る調節が失敗に終つた場合であつて、持荷増加に由る市價の維持が、却つて割安相場を永續させるのである之れと反對に商人が間違つた實思惑をして、割高相場を永續させる事もある。

第七章 交換の目的

(一) 交換の本質

本來から云へば交換は生産の補助作用である、生産は天然物に勞力を加へて、それを人類の生存に適合せしめる、その方法は二つある、第一は天然物を變形することであり、第二は天然物の所在を變へることである、材木を組立て、椅子を造るのは、變形の一例であり、地下の石炭を掘出すのは、所在變更の一例である。處て單に天然物を變形し移動させただけでは、生産の目的を完全に遂げ得ない。斯く變形移動させた品物を、其必要を感じてゐる人に、利用させる處まで往つて、初めて生産の目的が完成する。此の如く總ての生産物をして、最も必要を感じてゐる人の手に歸せしむることが、交換の目的である。

効用漸減の法則によつて、或る貨物が一人の人に對して與へる効用は、その貨物の分量が増加するに従つて減少する。而して其分量が減るほど、その人に對する其効用は高まる。それ故總ての貨物は餘分に持つてゐる人の中から全く持たない人、又は缺乏を感じてゐる人の手に移らうとする。その手段として物々交換が行はれ、更に進んでは貨幣を仲介する賣買が行はるゝに至つた。賣買の行はれるのは、或る貨物を餘分に持つてゐる人が、其賣方として現はれ、其缺乏を感じてゐる人が買方として現はれるからである。而かも賣方は成るべく高價に賣らうとし、買方は成るべく廉價に買はうとする。之れは最少の犠牲を拂ふて、最大の効果を收めようとする根本原則の當然の結果である。其處で相場が決まるのは、賣手と買手との申し出が、相合致する處である。今日我々は株式市場や期米市場に於いて、然ういふ方法で、公定値段の決めるゝのを實見することが出来る。總ての商品相場も同じ方法で決まるのであるが、

社會が複雑になるにつれて、賣方と買方とが直接に會合することが困難になるから、商人が兩者の間に介在して、生産の目的を完成させる。さうなつて來ると、生産者は商人を目當てに生産し、消費者は商人の手から必要品を供給される。斯くて當初は生産者の補助機關に過ぎなかつた商人が、後には生産者を指導する如き位地を占め、當初は効用價値の創造を目的とした生産が、次第に交換價値の創造に重きを置くようになつて、遂には貨幣の收得が生産の目的である如き外觀を呈する。勿論それは單に外觀に止まるが、貨幣常用の習慣に囚はれてゐる人達は、動もすれば交換の本質を忘却する。

前にも記す如く交換の任務は、比較的効用の低い品物を、比較的効用の高いものに換へることである。此事實を基礎として交換は相互の利益也といふ原則が承認される極端に云へば賣手も買手も不必要なものを手放して、必要なものを收得するのである

併し實際はそれが必要の程度問題に過ぎない爲めに、交換が相互の利益だといふことが、明白に認識されないのである。有無相通すると云へば、ハッキリ判るが、比較的有と比較的無との交換だといふは、何だか曖昧に感ぜられるのである。

(二) 外國貿易

交換に由る相互の利益を説明するには、外國貿易に就いて觀察するのが便宜であらう。日本には殆んじ鐵礦がない、而かも現代の生活に於いて鐵は極めて必要なものである。随つて何物を以つて、外國の鐵と換へ得るならば、日本人はそれによつて缺乏してゐる鐵を、必要な丈に使ふことが出来る。その代價として支拂ふものは、鐵より缺乏してゐないもの、即ち効用の低いものならば、何物でも好い筈である。併しそれは外國人が必要を感じてゐるもの、即ち外國に於いて鐵よりも缺乏してゐるもの

でなければならぬ。然らざれば外國人はその代りに鐵を與へることを、肯んじないからである。其處で日本に比較的潤澤にして、外國に缺乏してゐる生糸を提供すること。斯くて鐵も生糸もより多くの効用を發揮し、交換の當事者は共に満足する、それ故交換は相互の利益だといふ事になるのである。

而して外國から何を輸入すべきか、外國へ何を輸出すべきかを、決定する標準となるものは、その物の價格に外ならない。若し鐵が日本に尠くとも、その價格が外國から輸入して引合ふ處まで騰貴しないならば、輸入を必要とするほどに鐵の需要が無いものゝされる。外國に生糸が乏しくとも、その價格が輸出して引合ふほど騰貴しないならば、日本から買ふことを必要とするほど、生糸の需要がないものと見做される。苟くも價格の地方的相違が交換を有利とするならば、商人は其機會を逸せず、貨物を最も効用の多い處（即ち現今では價格の高い處）へ趣かしめる。斯くて當初は有無相

通ずることを目的とした貿易が、今では價格の平準運動を完成する作用を、主要任務とするに至つた。曩きに記せる如く物價の國際的不均衡が、貿易によつて矯正される傾向を示すのも、此作用に基くのである。

此處まで考へて來るに、此價格の平準運動が、貨物の生産費にどんな關係を持つかといふ疑問が起るであらう、從來一國の産業の分布は、國內に於ける貨物の需要に順應するに説いて來たが、國際貿易が發達するにつれて、其分布状態も變つて來る。産業分布の歴史的變遷を詳しく研究して往くと、價格の地方的差違に基く交換の發達が刻々に其分布状態を變へつゝあることを發見する。

(三) 貿易と國際分業

人類が孤獨の生活をするときには、自己の望慾に刺戟されて生産をする、それが集

團的生活を営むときには、自己に最も適當した職業を擇ぶ、それによつて分業的生活が行はれて交換が發達する。而かも交換の發達は最も適當した職業の選擇標準を生産費の貴廉に依らしめる。即ち最も多くの報酬が得られる仕事、最も適當した職業である事にする。其處で産業の分布が利益の多少を中心にして、變化して往くこととなる。現代に於いては各個人の職業の撰定も、各地方に於ける特殊産業の發達も、國際間に於ける産業の分布も、他人、他地方、又は他國との比較に於いて、最も有利なものを選択することによつて、決定されるのである。前掲鐵と生糸の例で云へば、日本では鉄一噸を造るのに六十圓を要し、米國では同じ品物を造るのに四十圓で足りる然るに生糸一斤は日本では十五圓で出來、米國では二十圓を要するに於いては日本は生糸の生産に適し、鐵の生産には適せず、米國は反對であるといふに歸着する。其處で日本では養蠶業が發達し、米國には製鐵業が榮へる、斯様にして國

際間に於ける産業の分布が決まる。

處が米國の如く資本が豊富で天然物の多い國では、總ての貨物に於いて、日本よりも廉價に生産されるといふこともある。例へば鉄鐵は六十圓で出来、生糸は十四圓で出来する。その場合には日本は米國から何を買つても儲かるが、賣るべきものを持たないことになる。それでも尙ほ交換は行はれる、即ち日本の生糸四斤は米國の鐵一噸と交換されるが、内地の鐵と交換すれば、四分の三噸しか得られない、その時には日本人は矢張り鐵を造る代りに生糸を造り、そしてそれを米國へ輸出して、米國の鐵を輸入する。但し此場合に於いて米國へ賣る生糸は、十四圓以下でなければならぬ。而かも生糸よりも米國に於ける同種商品との、生産費の差が尠いものがないとすれば、他の品物を以つてそれに代へるわけには往かない。随つてさうしても日本に於いて比較的生産費の最も低廉な生糸を、十四圓以下で輸出する必要がある。然うするには

日本に於ける物價の平準を引下けて、國內に於ける生糸の交換價値を十四圓以下にせねばならぬ。曩に記した通貨の流出や爲替の下落は、自然に此作用を行ふものであつて、それによる物價平準の低下は、生産能率の低い國の賃銀を引下けて、輸出品の生産費を低下させるのである。換言すれば生産能率の低い國民は、他國よりも低級な生活をする事によつてのみ、貿易の均衡を保つて往くことが出来るのである。歐洲大戰以前多くの日本人は、我國は賃銀が安いから、外國と競争して往けるのだと言ふた。實は其反對に我國の生産能率が劣つてゐた爲めに、賃銀が安かつたのである。尙ほ此點に就いては後に記述する機會あるべきも、從來此點を明白に説明した書物を見受けないから、此處で一應の説明を試みたわけである。尙ほ右の鐵と生糸との價格の比較には、運賃口錢等の事を省いて置いたが、此の點も後に記す積りである。

國內に於いても右と同様に、生産能力の多い人は、その尠い人よりも富裕な生活を

してゐる、貧乏な生活をしてゐるのは、必ずしも職業の選擇を謬まつた爲めではないのである。此事は生産論や分配論の中に繰返して説明する機會が起るであらう。

(四) 交換様式の進化

交換の最初の形式は物と物との交換であつた、次は恐らく物と勤勞若くは勤勞と勤勞との交換であつたらう。勤勞といふのは貨物を生産する勤勞以外、醫師、音楽家、教師等の業務遂行をも包含する。貨幣が使用されるに至つて、貨物も勤勞もそれと交換される形式を探るに至つた。而かも社會の進歩は更に複雑な交換方法を案出した、將來の貨物と將來の貨幣との賣買、即ち先賣先買の契約も出來れば、現在の物と將來の物との交換、即ち物品貸借契約も行はれ、現在の貨幣と將來の貨幣との交換即ち金銭貸借契約も行はれ、現在の勤勞と將來の貨幣との交換即ち雇傭契約も行はれるに至

つた。是れ等も總て有無相通する手段であつて、交換の變形に外ならないのであるが普通の賣買とは異なつた形式を示す爲めに、別個の現象として取扱はれ、雇傭契約については貸銀問題、金銭貸借に就いては利子問題等の六ヶしい議論が起つてゐる。併しそれ等も交換の一變形であることを記憶して置かないと、正當な解釋が下されない事になる。

右の中で貨物の先賣と先買とが現物賣買の變態に過ぎないことは、誰れにも判つてゐる、而してそれ等が價格の平準運動を助成する効果は、現物賣買よりも適切な場合が尠くない。蓋し生産者は先賣契約をしてゐることによつて、將來受取るべき代價を豫算し得るから、安心して生産を続けることが出來、商人は先買契約によつて、受取るべき品物の代價を知つてゐるから、安じて顧客の需要に應ずることが出來、そして生産者も商人も不時の需要に應ぜずとも、營業を續けて往けるから或程度まで手持在

荷を節約することが出来る。先約賣買が此意味で繼續されてゐる間は、社會は無用の貯藏を避けることが出来るが、時としてそれが投機的に悪用されると、價格の上に甚しい動搖を惹起す、此點は金融市場に關する説明と共に、後に詳しく説明する。

物品貸借は金銭貸借とは少しく趣きを異にするが、先賣先買とも目的を異にするものであるから、利子論の中に述べるのが妥當である。但し先約定履行の爲めの一時的貸借は、先賣先買契約と同じ事になる。先日附手形による賣買や、金銭前拂の賣買も金銭貸借の一變形であつて、同じく利子論の中に説明さるべきものである。賃銀前拂の雇傭契約も、金銭貸借の一變形と見做される、勞働はその實行によつて、初めて賃銀に對する代償物を造り出すからである。雇傭契約は人を買うのではなくて、其勞力を買うのである。更に詳しく云へば其勞力の成果を豫想して買うのである。その詳しい事は賃銀論の中に、述べらるべきものである。

(五) 交換と生産との分界

交換は生産の最終過程である、随つて交換を終るまでは生産は完成しない事になる例へば石炭に就いて云へば、山から掘出すまでを生産本來の任務と見ることも出来れば、集散地へ送り出すまでを然りとする事も出来るが、完全に生産の目的を果すのは、それを消費者に引渡したときである。家屋建築受負業の如きは其一例である。然らざるに、生産の中には交換が含まれることになる。併し現代の生産組織に於いては概ね商人の手に渡すまでを、生産の過程と見做す。されば商人は生産の最終過程の完成者として働く、それが爲めには店舗及び倉庫を設備せねばならず、消費者に代つて一時代金を立替へて置かねばならず、更に生産者と同様に貨物の所在を變更せねばならない。斯くてそれ等に要する費用は、販賣費として貨物の生産費に附加される。而

かも生産者も亦商人に賣渡すまでに、若干の販賣費用を要する。大抵の貨物が二重にも三重にも交換されるから、生産と交換との間には、明白な区分はないのである。

各種の輸送機關は、本來生産の補助作用をするものであつたが、現代では概して商人の手に利用されてゐる、唯此一事から云ふても、生産と交換との区分が明白でないことが判らう。随つて生産費と販賣費との間にも、明確な區別は立て難いのである。之れは生産費に就いて研究する場合、忘れてはならぬ事柄である。

第八章 競争の各種變態

(一) 稀少價値と獨占價値

従來は物の價格は賣人と買人の、相互の競争によつて決まると記して來たが、それには多少の例外がある。例へば古代美術品の如きは新規に製作するわけに往かないか

ら、賣方に競争の起る餘地なく、相場は買人の競争のみによつて決まる。但し其場合でも多少類似品の賣方が、競争圏内に入つて來る。例へば探幽の畫にしても、同じものはなくとも似寄つた品はある、假りにそれが二つあるとして、一方が法外な高値に賣れると想へば、他方が賣物になつて、其値上りを抑へる。之れは需要の彈力が、代用品によつて強められる一例と見ることが出来る。斯くて類似品の乏しい品ほど、買方の競争を抑へるものがないから、高い値を出すわけである。之れを稱して稀少價値と云ふ、買方の競争が特に強い場合を指すのである。如何なる貨物でも、其供給を獨占すれば、之れと同じ結果が起るわけだが、新規に生産し得るものには、絶對的獨占は有り得ない。

或る生産者が貨物の供給を獨占する方法は、二つある、第一は其生産に要する天然物の獨占、第二は法律によつて競争の禁止される場合である。樟腦を製作する原料が

臺灣にしかないとすれば、全部の樟樹を占有することによつて、供給を独占すること
 が出来る。然ういふ手段を講じた一例としては、米國に於いてスタンダード會社が
 石油の供給を独占せん企てた歴史を擧げることが出来る。併し此種の企圖は、完全
 に成功しないのが普通である。法律による独占の最も著しい例は、新發明品に對する
 特許、鐵道に對する競争線敷設の禁止等である。斯かる場合には或る程度まで独占の
 形が出来上る。是れ等独占事業に在つては、古代美術品と同様に、買人の競争のみに
 よつて相場が決まるわけだが、美術品と違ふのは、生産者が任意に供給高を増減し得
 る事である。此場合に於いては生産者は、最も利益の多い程度に供給を制限する。曩
 きにも記した如く需要は購買力によつて制限される、それゆへ値が上れば一個當りの
 利益は殖えても、需要は減る。例へば特許を得て家具を製作するとする、一年千個作
 れば一個當り九十圓で出来、八百個なれば百圓かゝり、五百個なれば百二十圓かゝる

とする。此場合需要は千個に對しては九萬圓にしか評價せず、八百個に對しては八萬
 五千圓に評價し、五百個に對しては六萬四千圓に評價するとする、單價は供給の減少
 につれ九十圓、百六圓二十五錢、百二十八圓と漸進するが、利益計算は左の如くにな
 つて、八百個造るのが、最も有利になる。

- (一) 千個の場合、生産費九萬圓、賣上代九萬圓、差引利益なし。
- (二) 八百個の場合、生産費八萬圓、賣上代八萬五千圓、差引利益五千圓。
- (三) 五百個の場合、生産費六萬圓、賣上代六萬四千圓、差引利益四千圓。

右の如き計算によつて、特許を得た人は、其生産高を最も利益の多い數量に制限し
 て、徒らに市價の騰貴のみを圖らない、之れが稀少價値とは趣きを異にする點である
 鐵道が運賃を決めるのにも、此點を考慮して、妄りに賃率を引上げて、貨客を減少さ
 せることを避ける。尙ほ此事に就いては、後に詳述する場合が起るであらう、生産と

關聯する問題だからである。

(二) 關稅の障壁

貨物の市價は世界的に平準に歸すべき筈であるが、輸送及販賣費の差支は、相違せざるを得ない、それは國內に於いても同じであつて、生産費の地方的相違を計量するときには、それを差引かねばならぬ。賣方の競争は、勿論それを見込んで行はれるのである。處が近代の國家は、概ね關稅によつて、生産費の國際的差違を消滅させ、内地の産業を外國同業者の競争から、庇はうごしてゐる。之れは或種貨物の生産者に特殊利便を與へて、國際間に於ける自由競争を阻害するものである。それが好い事か悪い事かは、政策論の中に論ぜらるべきものである。それが國內の産業にどんな影響を惹起すかは、生産論中に論ずるのを妥當とする。茲では唯それによつて内地の供給

が制限される結果、その國內に於ける價格が騰貴することを述べれば足りる。世人はそれによつて内地の生産を増加する點を認めるが、それが需要を抑へる點を説いたものは稀れてゐる。一噸卅圓ならば三百萬噸の鐵が消費されるとする、それが五十圓になれば二百五十萬噸しか消費されぬかも知れぬ。此場合五十萬噸の相違は、國民生活の總ての方面に色々の影響を惹起するのである。随つて保護關稅の問題は、唯價格騰落の關係のみでなく、國民生活の上からも考慮せねばならない。假りに外國の書物に重稅を課して學術研究の機會を少くしたとする、それは高い書物を購入する人よりも、更に多大の犠牲を拂ふてゐるものゝ存在を意味する。之れは内地の消費稅等に就いても、考慮すべき點であつて、商品に對する總ての課稅は、消費の分布狀態を變へしむることを記憶せねばならない。

(三) 不可抗力の影響

我々は大正十二年秋の大震災によつて各種商品の市價が甚しく變動したことを記憶してゐる、それ以上に價格の變動を惹起したものは、歐洲大戰の突發であつた。是れ等の場合に於いても價格は一刻も早く需給を適合させて、平價に復歸しようとして盛んに動搖する。而かも其結果は不足せるものを過剩に導き、過剩せるものを缺乏させる如き、正反對の現象を惹起させる事もある。それは利益の誘惑が過度に働く爲めである。此の如き關係から、騰落相循環する傾向を持つ。其詳しい事は所謂經濟動態の研究部門に屬するが、其處まで研究を進めて往かないと、需給適合運動の實相は判明しない。本書は經濟學入門者を目當てに記してゐるのであるから、それまでを包括し得ないから、後日動態研究に關するものを、述作する豫定である。

凶作による農産物の供給減少も、不可抗力に由る變動の一例であるが、統計的に其發生の豫想されるものは、甚しく價格を動かさない。但し古代交換の範圍の局限されてゐるときは、凶作の際に於ける穀價の騰貴は非常な程度に達したこともある。越後長岡の高橋氏の記録によれば、天保七年には米價が平年の二三倍に騰貴してゐる。近年では左様な激變は起り得ない、交換の範圍が擴大した爲めに、相場の変動が調節されるに至つたのである。

第九章 生産と生産

(一) 人類と其環境

生産とは人類が其勞働によつて、天然物を變形又は移動して、人類生活の要求に適合せしむる事を指す、即ち其本來の目的は効用の創造に在る。而かも現代に於いては

交換價值が其効用の大小を測る尺度となつてゐる爲に、生産は交換價值の創造を意味する事に轉化した。

人は天然物を利用することなしに、生産を遂ぐるを得ない、随つて生産には二つの要素が必要である、第一には人の勞力、第二は天然物又は天然力である。之れを概稱して勞力と天然といふ。原始的生産にはそれ以上を要しない、而かも天然は有りの儘の状態に於いては、無價值のものであるから、價值の起因を探究すれば、常に勞力に歸着するのである。

生産組織が複雑になつて來ると、二つの第二次的要素が必要になる、其第一は生産用具即ち資本であり、第二は産業統率の才能である、此二つは共に勞力効果を高めて勞力の價值生産率を増進させるものである。現代に於いては、此第二次の要素が各國の産業を支配する最大勢力になつてをり、原始的生産方法は未開國の一少部分にしか

残つてゐない。

如何に産業組織が進歩したにしても、天然物を土裏とせず、生産するこゝは出来ない、自然各國の産業は、その國の地勢地質氣候等に順應して發達する。英國が近代機械工業の先頭に立ち、その人口と地積との狭少に拘らず、世界最大の富國となり得たのは、石炭及鐵礦の多かつた資だと稱せらる。今日では米國が世界一の富國と稱せられるが、そんなつた原因は、矢張り天然の恩恵が豊富であつた爲めに外ならない無から有を作り出し得ない以上、各國の産業はその國土が抱有する材料を基礎として發達する外はないのである。

獨逸は比較的天然の恩恵の稀薄なるに拘らず、急速に富んだ國の著例とされる、併し日本なきに比べるに、矢張り天與の産物は豊富であつた。唯それを利用する才能が他國に優つてをり、その利用に働く勞力が、他國より低廉であつた處に、稱賛に値する

事實が存する。勞力が他國より低廉であつたといふのは、個人の生産能率が高かつたといふのではなく、その國民が低級な生活に甘んじたのである。日本も長い間、同じ理由から勞力の低廉によつて、國際競争に堪へて來たが、近來大分に模様が變つて來た、此事は後に記す。

生産に關する最重要の問題は、如何にせば最も能く天與の富源を利用し得べきかに在る、獨逸の甜菜糖栽培の如きは、その工夫の成功した一例である。日本に水力電氣事業の發達したのもそれと同じ意味であるが、其機械は全く外國人の工夫を取入れてゐるに過ぎない、隨つて國民的成功の實例にはならない。海運業の發達は日本の地勢から來た自然の傾向であるが、それにて外國を凌ぐ程度には達してゐない。國民經濟の立脚點から云へば、是れ等の問題を徹底的に研究せねばならぬが、之れは要するに企業技術の範圍に屬するから、企業論の中に詳述するを妥當とする。今は姑く生産發

達の跡を尋ねて、其處から現代經濟學上の難問題たる分配論の發生に説き及ぶ事にする。

(二) 分勞、協力及び分業

生産發達の歴史に於ける最も著しい傾向は、個人的職分の専門化即ち分業の發達である。極めて幼稚な生産に在つても、分業及協力は行はれてゐる、例へば漁夫が網を打つのに、船を繰る者、網を曳くものが、同じ目的の爲めに、別な仕事をする如き大きな石を動かすのに、多くの人が力を合せる如き、皆それである。然うすることによつて、勞力の工程が著しく高まることは、何人も知つてゐる處である。それと同じ理由から、大工は大工、左官は左官といふ風に一つの職業を専門にするものが現はれ更に進んで唯一つの仕事の各部分を、専門的に分ける様になつた、例へば一つの時

計を作るのに、針を作るもの、蓋を作るもの、組立てるもの、針の原料を作るもの等各自の分擔を一定する如きてある、此種の分勞が如何に高度に行はれてゐるかは、各種の製造工場を一見すれば、直ちに了解される。斯様に分業分勞の行はれた結果が、生産能率を高め得た事實は、多くの學者によつて詳細に説明されてゐる、今更蛇足を加へるにも及ぶまい。

分業即ち各種職業の専門化は、原則として各人をして自分に最も適當とする仕事を擇ばしめる。併し之れには多くの例外がある、大抵の人は幼時よりの習慣と練習とによつて、自分を一つの仕事に適合させて往くのであつて、實際は、餘り適當しない仕事に従事してゐることもある。中には又其境遇や氣分から、不適當と知りつゝ、父祖傳來の仕事を繼續してゐるものもある。最近新しく職業を擇ぼうとする人に、心理的試験を實施して、最適當の仕事と與へやうとする傾向の現はれたのは、成るべく此種の

例外を少くせんとする努力と解することが出来る。

同一職業内に於ける分勞は、分業を更に細かくしたものと見るべきだが、此方は工場管理者又は勞力統率者が、細心の工夫を凝して、各部分に適當な人を箝め込むのであつて、分業の如く従業員に自由選擇の餘地が與へられず、自然女や小兒で出来ることとは、それ等のものに割宛てられる。分勞の發達は勞力功程の増進以外、賃銀の低下をも目算に入れてゐるものであつて、人の勞力を商品化する歴史に、一新紀元を劃するものである。之れが更に進んで來るに、今度は仕事の一部を出来るだけ機械に割宛てようとし、又は男子の代りに女子小兒を用ゆることを工夫する。此の如くにして勞働問題は、現代産業界の重要事項となつた、之れが研究は最も興味あるものである。職業が専門化するに従つて、一つの職業から他へ移ることが困難になる。高度の分勞の行はれてゐる工場に働いてゐるものは、特殊の技能を習得する機會なく、全く機

械と同じものに見做されて了ふ。斯くして一面には移業の自由が失はれ、他方には不熟練労働者の需要が殖へ、労働者の素質を次第に低下せしむる傾向ありと稱せらる。併し此問題は左程簡單なものではないから、詳しい事は經濟動態を研究する際に述べる

(三) 報酬漸減の法則

生産は人々天然の協力によつて行はれる、随つて人が労働するのに、常に其相手になる若干の天然物を要する。例へば獵師は狩るべき山野を要し、漁夫は漁るべき河海を要し、農夫は耕すべき田畑を要し、礦夫は採掘すべき礦脈を要する。若し一千人の人が一萬町歩の土地に働いてゐるならば、各自に割宛てらるべき地面は十町歩であるが、それが二千人になると一人當りは五町歩になる。例へば全部を農夫とするならば一人て十町歩を耕したものが五町歩しか耕せないことになる。人類の繁殖は絶へず一

人當りの利用面積を縮少する、その結果は常に生産能率の減少を來す。蓋し一人て十町歩の土地を耕してをれば、最も耕作に適する處を擇ぶことが出來、比較的容易に所要食料を得るこゝが出來る。それが二町歩になつたときには、その全部を耕しても尙ほ所要の食料を得難くなる。然うなつても、人は生活して往かねばならないから、比較的不適當な土地までも耕さねばならず、而かも其上に二町歩の内て所要の食料を得る工夫を凝さねばならぬ。斯くて出來るだけ精密に土地を利用するこゝを考へ、從來一尺鋤き返してゐたのを二尺にするこゝか、肥料を施すこゝか、用水を作るとかする、それによつて或る程度まで土地の産額を増すことが出來るが、然うする結果として收穫米一石當りの勞力は、從來に比ぶれば次第に増して來る。獵場漁區礦山等に於いても之れと同様であつて、同一面積に對して働く人が殖へるに従つて、一定の生産物を得るに要する勞力が増大して往く、換言すれば勞力効果が薄らいて往く、之れを稱して

報酬漸減の法則といふ。それによつて生活難の増大するのを避くる爲めに絶へず生産上の技術が改善されて往く。産業發達の歴史は此天然の抵抗に打勝たんとする人類争闘の連続であつて、人類の繁殖が繼續する限り、停止することはないであらう。

報酬漸減の法則に對抗する人類の努力は、三つの方向に進む、第一は前記分業分勞等による勞力能率の増進、第二は未開地の開發、第三は既に利用してゐる土地の一層精密な利用である。何れの國に於いても、此三種の努力は概ね同時に行はれてゐるが日本の如く人口が過度に稠密になつた處では耕作地の擴張は非常に困難になり、(一)外國食料品の輸入、(二)植民政策、(三)移民奨励等の方法が行はれる。第二と第三とは主として政策上の問題であり、第一は經濟問題として研究さるべき事柄である。

(四) 耕境の低下

人口の増加や生活の向上につれて、從來放棄されてゐた土地を耕し、又は新漁場に出稼する等の場合には、收穫物一單位に對する勞力の割合即ち生産費が増加する。例へば米一石の生産費が十圓で足りたものが、從來より不適當な土地までを耕すようになれば、十二圓になり、更に不良な土地を耕すに至れば十五圓十六圓と累増して行く斯様に天然物の利用範圍を廣めて往くのを稱して、耕境の低下といふ。需要の増加がその價格を高めて、從來よりも肥沃でない土地までを耕させるのである。此法則は林業礦業狩獵等の天産物獲取事業には總て應用されるものである。

將た又利用地面積を増加せずとも同一の土地を一層精密に利用することによつて、生産高を増加することも出来る。此場合に於いても生産費の漸増することは、曩きに記した如くである。新しい土地を利用するよりも、斯様に集約的生產方法を採用した方が、利益であるを考へられる場合には、此方法が擇ばれる。要するに最少の勞力を

以つて、最大の効果を擧げることが、撰擇の標準になるのである。假りに或る地方に於いて此方法のみが擇ばれる場合ありとせば、表面上耕境低下の事實は起らないがそれに伴ふ生産費の増加は、自然に他の地方に於ける可耕地面積を擴大させる。而して従來利用されてゐた土地は、新規に利用される土地に比し、優越せる位地を占めることになる。斯くして現在利用されてゐる土地の生産力には、段階的に相違が起つてゐる。其最下級の土地を耕境に在るものニ稱し、それを標準にして、生産力のそれより多い土地は、それが他人に貸與される場合に於いて、賃料即ち地代を生む。自からそれを利用して、地代に相當する利益を収め得らるゝのである。

何故に然うなるかと云へば、土地生産物の價格は、耕境に在る土地の生産費を標準にして定まるからである。それは若し耕境に在る土地の生産物が、その生産費を償ひ得ないならば、その利用は中止されて、その貨物の供給不足を來し、そして耕境に在

る土地の利用を復活させる値段まで、價格を引上るからである。斯様にして總ての生産物の市價は、供給過剩に陥らない限り、その時の最高生産費を標準にして定まる。此原則は各種の加工事業運輸事業等にも當筈のもので、その結果天然勞力及び資本の巧妙なる配置により、他人より低廉に生産し得るものは、土地の所有者が地代を得るに同じように、企業利潤を収得するのである。即ち地代は土地の優劣に隨伴する收得であり、利潤は生産技能の優劣に隨伴する收得である。此點に關する詳しい説明は、分配論の中に述べる。

(五) 資本に由る能率増進

分業及分勞に由る勞力能率の増進は、一人の人をして繼續的に一つの仕事に従はせて、熟練を増し、時間の空費を避ける方法であるが、唯そのみて報酬漸減の法則に

對抗して、人類の生活を安易にして往く事は不可能である。如何に上手な獵師でも弓矢の力を借らねば、獵獲物漸減の趨勢に對抗して、生活を續けて往くことは出来なかつたであらう。人は器具の力によつて、その生産能力を十倍し百倍するこゝが出来最初に弓矢を作つたものは大發明家であつた、併しその作り方が簡單であるから忽ちその眞似をされる、而してその發明は忽ち社會に往亘つて了ふ。斯くして總ての生産用具は間斷なく改善されて往くが、それが單純に眞似の出来るものである限り、最初の發明者がその器具の利用によつて、他人より優越せる位地を占めるこゝは、極めて短少の期間に止まる。即ち器具の發明は當初から利潤收得の素質を持つてゐるが、忽ち他人に眞似られる爲めに、單に過去の勞力の蓄積物として、新規の生産に參與する機能丈けが、明白な事實として承認され、他の一つの機能即ちそれによつて他人より生産上優越な位地を占め得る機能(假令短期間にもせよ)は、餘り注目されなかつた。

近代に至つてはそれが非常に重要視さるゝに至り、國家が發明者に特許を與へて、或る期間その模倣を禁止する如き政策が行はれてゐる。

それは儲て置き、過去の生産物を新規の生産に利用して、勞力能率を高める方法は二つの経路を辿つて次第に發達し、現代に在つてはその方法に依らないものは、絶無に近くなつた。二つの経路とは第一は弓矢の如く、直接に消費する目的でなく、唯將來の生産の爲めに、器械器具類を製作するこゝであり、第二は消費すれば消費に充て得るものを、次の生産の爲めに貯へるこゝである。此二つともに天然物に加へられた勞力を、將來の爲めに貯藏するものであつて、斯くして一度加へられた人力は、永遠にその價值を保存される。現代社會には過去數十世紀に亘る勞働の効果が繰越されてつて、それが生産を繼續させて往く基本財となつてゐる、是れ等の基本財を稱して資本といふ。それは億兆人類の遺産であつて、全人類を一團と見るとき、連綿として

子々孫々に受継がれて来たものである。財産私有の制度は、それ等資本の所有者を定めてゐるので、資本の貸借といふ現象が生じて、その賃料としての利子が、經濟學上の重要問題となるに至つた。右にも記した如く現代では無資本労働は、絶無になつてゐるが、世の中には何等の貯蓄も持たない人がある。其處で自己の勞力を有効に働かす爲めに、資本の借用が必要になるのである。

(六) 生産統率者の出現

今日我々が見聞する各種貨物の生産方法は、巧妙複雑を極め、中にも土地から得た生産物を加工變形する仕事即ち工業に在つては、一つの工場に數千人數萬人といふ労働者が集合して、世界到る處の需要を充さうとしてゐる、而して總ての生産者は互に少しでも低廉に品物を造らうとして、日夜苦心してゐる。斯くて産業は文字通り平和

の戦争となり、少しでも油断すれば、忽ち敵手に乗せられて、競争場裡から驅逐されて了ふ。斯かる状態になつて來ると單に勞力を省くとか、器具を改善するとか、天恵の多い未開地を探求する位の事では、到底時代の進歩に順應して往くことが出來難くなる。其處で多數の生産者を指導して、最低廉に生産せしむる統率者が必要になつて來る。中世交換が發達して生産者と消費者との距離が遠くなつた時、商人は或る程度まで其役目を果してゐたが、機械の裝置が複雑になり、一つの工場に多數の人を働かすようになると、商人の間接の指導は、餘り役に立たなくなり、専門の事業經營者を必要とするに至る。此役目を果す爲めに現はれたのが、所謂企業家なるものである。企業家は天然に勞力と資本とを、巧妙に配合して、他人より低廉に貨物を生産することを、その本來の任務とするものである。而かもその當然の結果として、需給變遷の趨勢を洞察し、物價騰落の大勢を豫見し且労働能率の増大、機械の改善、資本の融通

最も適當せる土地の撰擇等に甚深の注意を拂はねばならない。近代經濟社會に於ける此種事業統率者の任務は、戰場に於ける將帥以上に重要なものである。随つて當今では何人も生産の第四要件として、企業才能を擧げる。古代に於いても全然企業才能の必要が無かつたわけではないが、現今はそれが普通の勞働と、明確に區別されるに至つたのである。

第十章 生産費の貴廉

(一) 生産條件の優劣

曩きにも記した如く人類が當初貨物の生産に従事したのは、その生活の必要を充す爲めてあつたが、交換の發達につれて、生産者と消費者との距離が遠ざかつて來ると貨物の市價がその必要を測定する唯一の標準になり、生産の目的は交換價値の創造に

轉化して下ふ。其處で最少の勞力で最大の交換價値を創造し得ることが、總ての生産の理想となり、人類の生存には縁の薄いダイヤモンドの如きものに多大の勞力を費すものも現はれて來る。生産の目的が價格の創造に在る以上、何人もその生産費に比較して價格の高い品物を造らうとする。而してそれによつて、産業分布が定まる。道徳上の見地から、それを不都合と非難するものがあつても、それは全く別個の問題だとされる。

上來の説明に於いて總ての貨物の市價は、再生産費を中心として決まると述べてある。然らば再生産費は何によつて決まるか、それはその貨物を新規に製作するに要する勞力分量によつて決まる。價格發生の唯一の根源は勞力である、之れは何人にも利用の出來る天然物は、無價値だといふ前提から生ずる當然の歸結である。併し社會の進化は或る種の天然物に對し、個人の所有權を認むるに至つた。然うなつた曉には、

天然物からも價值が生れる如き外觀を呈して來る。

例へば甲は乙よりも優秀な田地を所有してゐる爲めに、乙と同じ勞力を費して乙よりも餘計の米を收穫することが出来る。假りに乙の收穫を二十石とし、甲のそれを二十五石とする、此差五石は土地の生産力に歸すべきものである。随つて甲の米と乙のそれとでは生産費が違ふことになる。されば生産費なるものは區々不同であつて、標準の立たないものになりはせぬか。

此場合米の市價を定めるものは、乙の生産費である、乙が甲よりも不利な立場に在るに拘らず、尙ほ米の生産に従事してゐるのは、二十石の收穫によつて、他の貨物を造ると、同じ報酬を與へられるからである。若し然らざれば乙は米の生産を止めて他の仕事に従事し、米の供給を不足させ、それによつて米の市價を高めて、乙又は他人をして乙の耕してゐた土地を耕させる。斯様な自然作用によつて、米の市價は常に社

會が必要とする程度に於いて最下田の生産費に一致しようとする。換言すれば供給過剩に陥らざる限り、最も高い生産費が、市價決定の標準になる。若し需要が減つて來れば、最下田の方から順次に耕作を止めて、働いて損にならない處までを耕すことになる。需要が殖へて來るときは、それと反對に米價の騰貴に刺戟されて、從來放棄してゐた瘠せ地までも耕するようになる。

斯様にして決まつた米の値段は、優良地の耕作者の收穫米にも適用される、其處で同じ勞力に對して、餘計の收入があることになる。而かもその原因は耕作地の所有に在るのであつて、勞働能率の差から來たのではない。それ故甲がその土地を他人に貸す場合には五石丈けを地代として要求することが出来る。借手にとつては地代なしで乙と同等の土地を耕すのと、少しも違はないから、甘んじて甲の要求に應ずる。

之れと同じ現象が近代式の諸工場の間にも起る、甲の工場では洋紙百斤を三圓で作

れるが、乙の工場では三圓五十錢かゝるとする。社會か二つの工場の全能力を必要とするならば、紙の市價は三圓五十錢を標準にして決まる。甲工場の收める百斤に付き五十錢の利益は、勞力以外の要素から生じたものである。それが工場所有地の利便又は植林地の優秀から來てゐるならば、地代になる。經營者の才能から來てゐるならば企業利潤になる。資本の多少から來てゐるならば、利子になる。但し此處で注意せねばならぬのは、資本は自由に増減融通されるものゆへ、利子以上の相違を、生産費の上で惹起さないといふことである。自由に移轉される生産要素は、生産費の貴廉を惹起す力を持たない。此事は分配論の中に詳しく述べる。

(二) 優秀地の占有

此處に十歩の無主地があつて、五人で二町歩宛擇んだとき、甲が乙より好い土地を

見付けたとすれば、それは甲乙の鑑識力の差に歸すべきもので、甲の受ける地代はその才能に對する報酬である、即ち近代の企業利潤と同じに視るべきものである。或る人が良い礦山を見付けたとしても、矢張り同様である。併し過去數千年の歴史から云ふと、各國民は優秀なる土地を領有する爲めに、驚くべき巨額の代價を支拂ふてゐる戰爭の爲めに費された費用と人命とを考へると、土地は高價な資本はないかも知れない。けれど一國內に於ける土地の占有は、必ずしもその地價に相當する勞力を要してゐない。斯くて土地の私有は天然物の横奪であるように見做されてゐる。

戰爭に由る爭奪費を別にしても、大抵の土地には人力が加はつてゐる、道路を作り草木を芟除し、溝渠を通じ地均らしをする如き皆それである。随つて此點から云ふても、土地は一種の資本と見做すことが出来る。唯普通の資本と異なるのは、第一には其所在を變じ得ないこと、第二には各種の加工が屢所有者以外のものによつて行はれる

こと、第三には面積が制限されてゐて、人力によつて増加し得ないこと等に由る。斯くて地代と利子とは、相異なつた法則に支配される。

併し土地の所有者に與へる便益も或る程度までは其利用者の才能によつて増加することが出来る。同じく耕作に利用するのでも最も適當した作物を擇べば、然らざる場合に比して、生産高を増すことが出来る。工場敷地の撰擇に至つては、將來に於いて甚しい便不便を生ずることがある。随つて土地の交換價値は、其地代によつて定まるのを普通とするが、企業才能によつて多少其價値を高めることが出来る。礦山の如きに至つては、其經營者の巧拙によつて甚しく其効用を増減する場合が尠くない。

(三) 勞力効程の優劣

土地生産物の市價が耕境に在る土地の生産費を標準とすると同じ様に、勞働生産物

の市價は、社會が必要とする最劣等の勞力を標準とする。例へば百坪の家屋建築が千手間で請負はれるとする、坪當り十手間が其場合に於ける標準勞働である。一人一日の賃銀を四圓とすれば、一坪の建築に要する勞力費は四十圓である、五人で造つても、それ丈の報酬は得られる。若し十二人手間を要する建築勞働者があつて四十八圓を要求するならば、何人もそれに建築を依頼しない。随つて此種の勞働者は耕境以下に在る土地と同様に、勞働圈内から排除される。但し勞働者は土地と異なつて、世の中に存在してゐる以上、生活費を要する、それ故等かの方法によつて、それだけの収入を得なければならぬ。建築業に於いて一人前の仕事が出来ないものは、他の職業を擇ぶ。他の職業を擇んでも、相變らず一人前の仕事が出来ないとするれば、その人は水準以下の賃銀で満足せねばならぬ。

假りに生産勞働者の需要が増さず、その供給のみが増すとすると、勞力の購買力は同

じて、その供給高が殖へるから、同じ賃銀をより多数の人に割當てる事になつて、曩きに四圓取つてゐたものも、幾分安い賃銀で満足せねばならなくなる。併し新加入者が右の如き能率の低いものであれば、從來の労働者がそれよりも高い賃銀を得る事實には變りはない。即ち賃銀は全般的に低下するが、十分の四十對十二分の四十の比例には變化が起らない。日本に於ける建築労働者の數を百萬人であつたを假定し、毎日五百萬圓宛之れに拂はれ、而して標準賃銀は四圓であつたとする。百萬圓は地代と同じく、優秀な勞力に對する報酬として支拂はれてゐたのである。労働者が百二十萬人になり、而かも總賃銀支拂額は増さないとすれば、標準賃銀は恐らく三圓に降るべく百四十萬圓は優秀職工に對する附加報酬になるであらう。新加入者を平等に三圓宛取るものとする、その分が六十萬圓、殘餘の四百四十萬圓が従前の百萬人に割宛てられる、而して曩きに四圓受取つてゐたものは十分の十二の比例で三圓六十錢受取る。此

階級以上に屬するもの、附加報酬は八十萬圓に降る。併し能率に比例して割増の得る、事實には變化が起らない。

右に反對に建築労働の需要が増加して、労働者數は變らないとすれば、最低賃銀が引上げらるゝと同時に、技術に伴ふ附加報酬が著しく殖へて來る。假りに四圓の標準が五圓になつたとすれば、曩きに二人分取つてゐたもの、賃銀は、八圓から十圓に引上げられる。併し勞力能率に二倍の差があるとせば、五圓の労働者を二人雇うたと同じ結果が得られるから、雇主には何等の損失も起らない。

斯様に賃銀は労働能率に比例すべき性質を持つてゐる、随つて低廉な労働者を雇入れて、他人より低廉に生産するといふことは、地代の安い土地を耕すと同じ様に、無意味な事である。

處が同じ土地でも其利用方法によつて、生産力を増させ得るように、同じ勞力でも

その働かせ方によつて、大に其能率を高めることが出来る。單に分勞協力の組織を、巧妙に作り上げるのみによつても、能率の増進を圖り得るが、更に機械の力によつて大にそれを高めることが出来る。此種の能率増進は勞力と企業大能の結合によつて行はれるのであつて、それによつて得た附加生産物を、如何に分配すべきか、頗る六ヶしい問題になつて来る。此點は後に詳しく説明する。

(四) 資本と生産力

生産に参加する四種の要件中、資本丈は價值創造の力を持たないものである。過去に於いて創造された價格が、其儘新しく創造される價格の中に包含されるのである。生産に於ける資本の役目は、同一價値の繼續的再現に過ぎない。百萬圓の機械及原料を使い盡して二百萬圓の貨物を造つたとすれば、新規の百萬圓は土地勞力及び企業才

能の成果であつて、残りの百萬圓丈が資本價値の再現である。

一對の弓矢はそれが生産に利用されるべき、勞働能率を高める、けれど總ての人が弓矢を持つて獵をすれば、その獲物の代價は勞力代金に弓矢の消費費を加へた値段まで下がる。弓矢が市場に於いて賣買されるものである限り、その消費費以上を生産物代價中に附加することは出来ない、獵師間の競争が消費費を償ふに足る處まで、獲物の價格を引下けて了ふからである。棉を綿布にするこゝによつて加工費以上に棉の値を上げ得るならば、棉をその儘使用する人は無くなる、機械に在つては、唯其筋道が複雑になるのみである。

既に生産されたものは、自分で價値を増大する力を持たない、此點は無價の天然物と同様である。然らば資本に利子の付くのは何故か、それは貧富の懸隔が出来て、總ての生産者が平等の立場で競争することが出来なくなつたからである、資本の缺乏に

よつて、勞働能率の増進を妨げらるゝ場合、その貸借が行はれて、利子が附せられる地代は土地の生産力の不均一を反映し、利潤は企業才能の不均一を反映し、利子は富の不平均を反映する。唯資本には移轉性がある爲めに、利子は常に平準を保たうとする。資本が缺乏してゐる爲めに、己むを得ず不利な生産方法を行つてゐるものがあるとき、資本の貸借が行はれる。然ういふ生産者の存在が、社會的に必要であるとき、利子は生産費増加の原因となる。當今では資本の貸借が普遍的事實になつてゐるので生産費にはその社會の標準利子が附加されてゐる。随つてそれだけは、勞働所得の中から天引される、而して勞働者はそれだけの犠牲を拂ふことによつて、不利な生産に従事することを免れてゐる。資本と勞力の分配争ひは、現代の重大問題とされてゐるが、それは到底離れることの出来ない夫婦間の喧嘩のようなもので、兩者は密接に相互扶助の位地に立つてゐる。此點に就いては、後に詳てく説明するであらう。

(五) 企業才能の優劣

地主、資本家、勞働者、企業家の區分は、生産組織が複雑になるに随つて、順次に鮮明になつたが、現代でも相變らず此四つの職分を兼務してゐるものがある。我國の自作農の如きは其一例である。處てその農家の収入を増減される最大の要素は、主人公の頭腦の働きてある。一定の資本と土地と勞力とから得られる交換價値は、不可抗力に由る場合を除けば、大體に於いて一定してゐる。併しその資本を一層巧みに利用するか、その土地を一層巧妙に耕すか、その勞力の能率を更に増大させれば、従来よりも餘計の収入を得ることが出来る。資本を巧妙に利用する方法としては、使ひ易い鋤鍬を買入れるとか、良い種子を蒔くとかする、土地を巧妙に耕すのには、最も地味に適した作物を擇ぶことが、第一の要件である。勞力能率の増大法としては、資本

の助けを借りて、風車、水車を造るとか、牛馬を用ゆるこいふような方法もあり、鋤の使ひ方を變へるとか、苗の植へ方を變へるこか、稻の刈方を上手にするといふ如き、色々の方法がある。斯くして従來三町歩耕してゐた人數で五町歩耕すこかが出来一町歩當り二十石の收穫しかなかつた米を、二十五石宛取り、其上に若干の野菜類まで收穫することになれば、その爲めに要した資本の利子を差引いた殘餘は、農場管理の效果として、企業利潤となる。大工業に於ける事業經營者は此種の改良に全力を注ぐ専門家なのである。

現代の産業界に在つては、地代は多年の經驗によつて、略ほ一定し、利子は資本の需給關係によつて平準を保たうとし、賃銀も労働者の能力に應じて略ほ標準が出来てゐるので、その三つの要素を取入れて生産を行ふものは、當初から貨物一個當りの生産費を、略ほ豫算することが出来る。其處でそれを其貨物の時價と對照して、幾許か

の利潤が得られると確信したとき、企業計畫に着手され、割高な品物の値を下けて、他の物との平準を保たせようとする。而かも其豫想の間違つたときには、その計畫は損をする。勞力、土地、資本には積極的に損失を生ずる場合、即ち賃銀地代利子がマイナスになることはないが、企業利潤のみには、利得と缺損との両面がある。一社會に於ける平準以下の企業才能が、缺損を生ぜしむるのである。平準以下の土地は前にも述べた如く利用されずに抛棄される、平準以下の勞力は生活程度の低下によつて、平準化される。利子を生まない資本は、剩餘資財として遊ばさせられる。企業の能力は實地に試験して見なければ、優劣を判じ難い爲めに、平準以下のものでも利用される事があつて、その結果が缺損を産む。

(六) 最高生産費と標準生産費

若し總ての貨物の需要と供給とが、完全に一致してゐるならば、各種貨物の市價はその生産に要した最高生産費に一致する。之れは耕境に在る土地の生産費が、農作物の市價を定めるといふ原則を他の生産物にも適用し得らるゝといふまでにて、更めて説明する必要はあるまい。併し社會の進歩に伴ふ色々の變遷は、常に此水準を攪き亂し、總ての貨物に供給の過不足を惹起す、そして其水準を取戻させようとして、常に生産の増減が起る。現實の經濟社會は此の如き變動の反覆場であり、随つて一日も雖も右の如き水平状態に在ることはない。随つて總ての經濟現象を理解する爲めには、所謂經濟動態に就いて深く研究して往かねばならぬ。

詳しい事は他日重ねて説明するとして、差當つて知つて置かねばならぬことは、生

産組織の進化が急速なる社會に在つては、所謂時勢遅れの生産者が、絶へず存続してゐるといふ事實である。嚴密なる自然淘汰の法則から見れば、生産圏外に排除さるべき生産者が、過去の隋勢によつて存在してゐるといふ事である。表面から見れば、それ等も亦社會の必要とする生産者であるらしい。併し仔細に點檢すれば、それ等は地代を喰込んでゐるか、標準以下の賃銀に甘んじてゐるか、標準利子を支拂ひ得ないか何處かで缺損を埋め合はしてゐるものである。斯ういふ生産者の残存してゐる限り、最高生産費の理論は當て筈らない。時勢遅くれの生産者が要する生産費は、市價決定の標準にはならない。其處で夫等を包括して云へば、最高生産費云ふ言葉は、標準生産費を改めねばならぬ、標準生産費とは缺損を生じない生産費といふ意味である。若しも資本と勞力の移轉が完全迅速に行はれるならば、而して企業上の誤算が生じないならば、標準生産費は最高生産費と一致し、標準以下で生産し得るものは、必ず企

業利潤を収得すべき筈である。企業の損失は標準生産費に對する實際生産費の超過分である。

人が生産に従事するのは交換價値の創造を目的とする、随つて企業の損失といふものは、起り得ない筈だが、事志を違ふて此の如き結果を生ずる。何人の行爲も常に豫期の結果を齎らすとは云ひ得ない、其處に不利益生産の行はるゝ理由が存在する。

(七) 生産費の不可分

上來の説明に於いては總ての貨物の生産費は、略ぼ計算し得らるゝものとして取扱ふた、處が實際は左程簡單でない。例へば米と藁とは同時に生産される、一頭の牛からは肉と骨と皮とがされる、その各種類の生産費を、各別々に計算することは不可能である。其處で普通の方法としては、食牛に在つては肉を主産物、乳牛に在つては乳

を主産物と稱し、その他を副産物と見る。處が近代式の大工場等に在つては、主産物と副産物の區分の明白でないものもある、例へば造船所が機械製作を兼ねてゐるとして、各製作物に對する總係費の分配方法は、精確には算出されない。斯ういふ場合には最も有利な生産物が、比較的多くの費用を分擔する事になる。二つの工場があつて一方は色々の副産物を造り、他方は殆んど副産物を造らないとする、主産物の生産費は著しく相違する。此場合何方の生産費が、市價決定の標準になるか、それは言ふまでもなく、廉價に生産するものが、市場を支配する力を持つ。けれどその工場のみで全需要を充し得なければ、需要者の競争によつて、最高生産費までその貨物の市價を高めるであらう。その場合には廉價に生産してゐるものは、非常に儲かる、其處で第三の侵入者即ち新生産者が入込んで來る。新生産者は勿論低廉な生産者の方法を模倣する、そして標準生産費を低め、最高生産者を時勢遅れの生産者にして下す。

此の如くにして一時代に於ける總ての生産組織は常に同一水準組織に適合しようとする。そして同一産業間に於ける各種生産物の生産費も、自から平準に歸しようとするのである。特に割の好い仕事といふものが、生産者間の自由競争によつて無くされて往くのである。斯くて標準生産費とは標準生産組織の下に要する生産費といふことに歸着するのである。天才的企業者は此水準化運動に反抗して絶へず新工夫を凝して生産費の低下を圖つて往く。他人の眞似しか出来ないものは、常にその跡を遂ふて往く。

第十一章 産業進化の趨勢

(一) 商業の發達

經濟界の變動には趨勢的變動と、循環的變動との二つがある。趨勢的變動とは所謂

時勢の變遷によつて起るものであり、循環的變動とは需要供給の波動を基本として生ずるものである。此二つの變動を研究するのが、動態研究の題目であるが、前にも記した如くその詳細は、別の書物で説明する。併し産業進化の大體の趨勢だけは、説明して置かないと分配論を講述するときに、多大の不便を感じる、仍つて此處には生産組織變遷の概略を説明して、どんな風に生産費の低下策が行はれて來たかを述べる。

通例産業の發達は、狩獵時代から牧畜時代に移り、そして農業時代になつた。稱せられる。狩獵牧畜の時代は人が天然の抵抗を避けて、最小の勞力で最大の生産を爲し得る地方に絶へず移動しつゝあつた時である。農業時代に至つて、初めて天然の抵抗力を征服することが考へられたのである。併し人口の増加に拘らず同じ地積を利用してゐたのでは、如何に工夫を凝した處で、報酬漸減の法則によつて、勞働の報酬は低下せざるを得ない。それ故人口が過度に稠密になつた地方では、土地耕作以外の方法

で食料を得ることを案出する。それは土地の産物に加工して、高級な品物即ち一層手数のかゝつた貨物を製作し、それを人口稀薄な地方の農産物と交換することである。斯くて人が移住する代りに貨物を移動させる。此の如くにして産業の地方的分業が發達する。斯くして人類は天然の抵抗を避けつゝ、種族の繁榮を圖つて往くこゝが出来る商業の發達は此方法の遂行を助長する必要條件であつて、間接に勞力能率の増進を助ける。それと相並んで人口稀薄な地方への、人類の移動も絶へず行はれ、そして耕作勞働と、加工勞働との収入を、互に平均させようとする。若しも勞力の移轉が絶対に自由であるならば、賃銀は貨物市價と同じように、世界的に平準を保つ筈である。人類の定住性と政治的障礙とが、それを妨げる爲めに、此法則は貨物に於ける如く、完全に行はれず、國際間の勞力價值に、甚しい差異を生ぜしむる。

人類の移動を妨げる政治的障礙は、同時に商業の自然的發達をも妨げる。斯くして

或る國民は、甚しく不利な生産に従事してゐる、之れは經濟政策問題に於いて綿密に點檢さるべき重要事項である。

(二) 工業の發達

土地の生産物に加工して、一層高級の貨物を作成すこゝ、即ち工業は、極めて古くから行はれてをつた、その起源に於いては商業よりも古かつたのである。併し商業の幼稚な時代に於ては、其附近にて生産される原料を基本として、加工業が發達するに止まり、それが一地方に集中することはなかつたのである。工業大中心地帯の發達は比較的近代の事に屬し、それは(一)商業の絶へざる發展と、(二)新式機械の發明と、(三)動力を以つて人力に代へる工夫と、(四)加工品に對する需要の漸増と、(五)新殖民地の發見等の、歴史的事實に隨伴して現はれた新現象であつて、當今では文化の進

んだ國ほど、工業を重要視する傾向が強い。畢竟人口の移動が國境によつて妨げられる爲めに、制限されたる地上に於いて、報酬漸減の自然法則に對抗して、勞働に由る交換價値の創造力を維持して往くには、加工事業に主力を傾注する外はないのであつて、獨り米國が此間に介在して、農業と工業との併進的發展を示してゐるのは、廣大なる未開墾地を抱有してゐる爲めに外ならない。我國に於ては、天然富源の貧弱な上に、人口が甚しく多い爲に、工業の發展を圖らうとして、可成り無理な事業にまで手を染めるに至つた。それが、國民全體に對して如何なる結果を生じてゐるか、詳細に解剖して見れば、頗る面白い事であるが、非常に面倒な問題であるから後日に譲る。工業中心地帯の發展は、更に進んで大工場の發展を促がし、遂には同種事業統一の傾向をも生ずるに至つた。斯くて何億圓、何十億圓といふ如き大資本を擁する大會社の出現を見、それに關聯して、色々な六ヶしい問題が起つて來た。自然最近に於ける

經濟學上の研究は、主として是れ等大工業に關する問題に集中されて、基礎産業たる農牧育林等の問題は、稍や閑却されてゐる形である。或る程度まで現在の經濟學は都市經濟學である、此傾向が悪い事だとは云はれないが、地方農村に就いての研究も、決して輕視してはならない。且つ又基礎産業の盛衰は、絶へず工業の上に其影響を惹起してゐるから、兩者の關係に就いても多大の注意を拂はねばならぬ。

(三) 産業の自然的發展力

人類の歴史が初まつて以來、その物質的生活は常に向上發展の一途を辿つてゐる。偶惡疫の流行や大戦争の突發等によつて、其發展に一頓挫を來したことはあつても、忽ちにして新規の活動が開始されて、次の繁榮時代を作り出す。我國に就いて云へば比較的平穩であつた豊臣氏時代や、徳川氏時代の中期がその實例であり、明治以來の

歴史は、更に明瞭に物質的文明の向上を立證してゐる。如何なる時代にも亡國を豫言する如き悲觀説は現はれるが、事實は人口の漸増と、國富の累積を證明してゐる。

何故に然るかと言へば、人は生産しないものを消費するを得ないといふ、簡單な事實に基くのである。それと同時に文明の進歩につれて、現在の生産物を將來の必要の爲に貯へることが次第に盛んになつて来る。斯くて如何なる社會に在つても、戦争とか大天災とかいふ如き、不時の事變が起らない限り、消費は生産の範圍内に止められるのみか、別に若干の剩餘を残す。此剩餘が貯蓄となり、而してそれが次の生産に使用される場合に於いて、資本と名けられるのである。貯蓄は人類の經濟生活を永遠に繼續させて往く貯水池である。此貯水の分量が多くなればなる程、生産の規模は擴大される。

貯蓄は之れを三つに分けることが出来る、第一は將來の準備としての生産物の貯藏

である、即ち世間に言ふ處の純粹の貯蓄である。第二は消費に伴ふ貯蓄、即ち耐久性を持つた貨物を消費する場合に起る消費の時間的延長である。食物には此耐久性が乏しいが、家屋、家具、衣服、裝身具の如きものは、消費されつゝも、貯蓄の役目をも務める、但し之れは資本化される機會の極めて稀なものである。第三は生産に伴ふ貯蓄である、農夫が土地を耕作する間に自然に土地の生産力を高めて往く如き、牧羊者が次第に羊種の改良を圖つて往く如き、皆是れである。産業が自然に發達して來たのは、多くの生産者が需要の増加に誘導されて、不知不識の間に此種の貯蓄を行ふ爲めである。一部の學者は此點に重きを置いて、生産は即ち貯蓄に外ならないと言ふ併し近代に於ける株式組織企業の發達は、兩者の區分を明かにし、生産物代金の一部が、新資本に變る筋道を、明白に示してゐる。新に生産された價值は、各階級間に配分されて、新規に要する資本は、更に株主から拂込まれる。個人企業者は、利益金を

其儘事業の擴張費に充てるから、貯蓄の形式が明白に現はれないのである。

各個人が將來の爲めに貯へ、生活の向上を圖り、子孫の計を爲すといふ事實によつて、社會の進歩に伴ふ資本の需要が充されて往く。富の増加は生活の向上及人口の増加とは、互に因果の關係に立つて、一國の産業を發展させるのである。而してそれに伴ふて色々の經濟現象が起り、それが經濟動態研究の主要題目となる。

(四) 集團生活の發達

人類は當初からその團結力によつて、他の種族や、他の生物との競争を遂行して來た、自然人類の歴史は、其集團生活の歴史に外ならない。近代國家はその極度に發達したものであるが、今では國際間にも或る程度の共同事業が行はれるに至つた。此種の政治上の進化は常に經濟上の變化を促がしたものであるから、經濟上の問題を論ず

るに當つては、何時でも政治上の關係を考慮に入れねばならない。その詳しいことは經濟政策論の中に説くべきであるが、一應はその輪廓だけでも知つて置かねばならない。

政治と經濟との相互關係に於いて最も基本的な問題は、財産制度のこゝであるが、今の處、私有財産制度を既定の事實と認めて、それを幾分宛變更修正して往くのが、最も賢明な策であると想はれる。私有財産制度を基礎とすれば、その生産物中の幾許を國民共同の目的に使用するか、第一の問題になる。財政學はそれに就いて研究するものであり、消費論中の重要項目である。次に問題となるのは、産業助成策である、その主な項目としては、(一)教育、(二)勞働者保護、(三)植民、(四)交通政策、(五)生産補助等を擧げることが出来るが、中にも學者間に議論の多いのは、關稅に依る國內産業の保護問題であつて、大抵の經濟書には此事を記述してゐる。此種の政策の實

行は産業の自然的發展に、人爲を加へるこゝであつて、その結果が各階級に色々の利害關係を惹起するからである。

救貧事業や、特許制度や、試験所研究所の設立等も、經濟政策上の重要問題である文明の高度に進んでゐる國ほゞ、是れ等の點に關する研究が往き届いてゐる。

資本家及労働者の聯合運動に關する干渉、失業者の救濟、最低賃銀の制定、不勞所得に對する課税等も、可成り面倒な問題として盛んに研究されてゐる。總て是等の事項は、經濟政策論の中に包括さるべきものであるから、別冊に於いて説明する豫定である。

(五) 世界的平準化運動

物價の平準化運動は、當初は一地方に限られたが、文明の進歩につれて次第にその

範圍を擴大し、今では世界的平準に歸着せんとする傾向が強いが、關稅の障壁と運賃諸係の關係から、幾分不均一になつてゐる。併し汽車と汽船の發明後、運賃の甚しく低廉になつた爲めに、自然的障壁は次第に除かれて關稅以外には、著しく平準化運動を妨げるものはなくなつた。紐育横濱間の運賃諸係と、横濱内地間のそれとの間に、大差がないと云ふ事實は、能く之れを證明してゐる。

之れと同時に國際間に於ける産業競争が、熾烈の度を加へるにつれて、或る國の生産者が、國內に於ける過剩貨物を外國へ投げ賣する政策、即ち所謂ダンピングが行はれて、時としては輸入國の市價を、國際的平準以下に低落させる事もある。此の如きは勿論價値變動の例外的現象であるが、斯かる場合の起ることをも、知つて置かねばならない。

物價の平準運動の行はれる範圍が廣まれば廣まるほゞ、標準生産費は世界的になつ

て來るから、一國內に於いて最も優秀な位地を占める生産者も、時勢に後れる心配が多くなる。随つて各國の企業家は、常に最新式の生産方法を採用することを、心懸けねばならぬ。我國の事業經濟者に、その注意の足らぬものゝ多いのは眞に憂慮すべき事態である。

第十二章 資本勞力の移轉

(一) 勞力移轉の障礙

資本勞力の移轉に關する問題は、經濟動態研究の重要項目である、随つて此處では簡単に説明するに止めよう。貨物の需要と供給とが、常に一致せんとする傾向を示すのは、資本と勞力が最も有利な仕事に流れ込む爲である。詳しく云へば或る貨物が供給過剰になつて、其市價が生産費以下に低落すれば、資本と勞力は其處を去つて

比較的供給の缺乏してゐる他の仕事に移る。斯くて過剰貨物の産額は減少し、不足貨物の産額は増加して、供給の過不足を消滅させる。人類の慾望は無限であるから、全般的供給過剰は起らない、總ての貨物は常に相對的關係に立つものであるから、全般的購買力の缺乏といふことは起り得ない。されば供給過剰といふ言葉は、特殊の品物に限定されて、初めて意味を持つ。購買力の全般的缺乏といふ言葉は、貨幣價値の騰貴と解して初めて意義を成す。斯くて貨幣價値の變動を除外して考ふれば、需給の過不足といふことは、部分的に起る現象であつて、供給過剰品のある一面には必ず不足せる品物がなければならぬ。随つて過剰貨物の生産に参加してゐる勞働者及び資本には、必ず移轉し得べき場處が有る筈である。それにも拘らず勞力及び資本の移轉は容易に行はれない。

之れを勞働者に就いて云へば、多年の經驗を棄て、新規の仕事に移るといふこと

は、非常に不利益である、これが轉業に對する第一の障礙となる。第二には現に一家を構へてゐるものにとつては、居住地を變更することが、多くの失費を伴ふ。第三には供給過剰が一時的であるならば、危険を冒して轉業するよりも、暫く不利を辛抱して、需要の増加を待つた方が利益である。第四には新しい仕事に従事するには、それに要する資本の供給が無ければならぬ、現代に於いては是れが最も著しい障礙になつてゐる。第五には風俗習慣等の相違から、住所の變更を喜ばない傾向がある、而かも轉業には住所の移動を必要とする場合が多い。最後に國際間に在つては、居住の變更が法律其他によつて制限されてゐる。米國に於ける移民制限問題は、米國にまつても對手國にとつても、經濟的利害の錯綜してゐるものであつて、單純な政治問題と見做すべきでない。

勞力の移轉には此の如き障礙があるから、總ての人が最も有利な事業に従事してゐ

るこいふ如き、理想的な状態は、殆んど實現されず、或る種商品の供給過剰が可成り永續することがあり、それを避くる手段として生産制限協定が行はれることもある。

(二) 資本移轉の障礙

勞力移轉の障礙は、それが人間に屬せるものだからである、資本も亦資本財に體現されて初めて生産に参加し得られるものであるから、勞力と同様に自由に移轉し得ない。器具にしろ工場にしろ、何れもその生産する貨物の種類に従つて、特殊の構造を必要とする、随つて製粉機は精米機には流用し得られず、發電機を瓦斯製造に流用するこゝは出來ず、極めて僅少の器具や原料丈けが、色々の仕事に流用し得らるゝに過ぎない。舊式の機械を新式のものに變へることすら、殆んど不可能である。随つて一度出來上つた資本財は、その必要が減少したからとて、他の事業に轉用されることは

殆んど起り得ない、此點から云へば資本の方が、勞力よりも更に移動性を缺いてゐる其處で一度生産設備過大に陥つた事業は、その生産物の需要が増加して、需給の適合を來すまでは、容易に有利に轉換せず、唯同業者間の生産制限協定によつて、損失を避け得るに過ぎない。斯様に考へて來ると、資本と勞力の移轉によつて、需給の適合を見るには、可成り長い歳月を要すといふに歸着する。處が實際に於ては、大規模の機械を使用する事業以外に在つては、比較的短期間に、需給の適合を見るものである。それは人口の増加と生活の向上によつて、總ての貨物に對する需要が、絶へず増加する傾向ある一面、新規に生産界に流入する資本と勞力とが、比較的供給の不足してゐる方面に働くからである。

新資本と新勞力とは、産業界の豫備軍とも稱すべきもので、それ等は絶へず最も有利な事業に入込まうとしてゐる、一ヶ年に現在高に對する百分の五の資本と百分の一

の新勞力が絶へず加はるものとせば、そして總ての貨物の需要が資本の増加率に比例して、平均的に増加するならば、二割方の生産設備過剰も、四年間には消滅する。唯需要の増加率が不均一な爲めに、或る種の事業は比較的長期間に亘つて、設備過剰を繼續する。我國現在の造船事業の如きは、その一例である。

(三) 資本財配合の良否

資本と勞力の移轉に關聯して、注意せねばならぬことは、資本と勞力との配合、並びに各種資本財の配合状態である。各種資本財の配合とは固定資本と流動資本との鈎合や、生産高と輸送能力との鈎合や、土地と工場との鈎合等を指すのである。十町の田地を耕すには、それに適合せる農具を必要とする、それより多く持つのは、資本の濫費であり、少く持つのは勞力の浪費になる。臺灣に於ける甘藷壓搾機械は、原料

の供給高に釣合はない爲めに全能力を利用し得ない場合が多かつた。原料仕入資金の缺乏から、機械を遊ばせた紡績業者もあつた、是れ等は皆資本財の配合を謬まつた例と云へる。好景氣時代に固定資本を増加した後は、必ず流動資本の缺乏が起る。之れも亦資本財の配合の宜しきを得ない例である。

同一事業内に於ける資本財配合の不均衡は、時として機械工場設備の不足に由ることもあるが、大抵はそれ等固定設備の過大に由る。之れは近代式工業組織が、好景氣時代の需要最盛期を基準にして、擴張されるからである。我國の農業に在つては可耕地の缺乏が著しい、その結果農民が貯蓄の一部を、都會の工業に投下して、屢巨多の損失を招いてゐる。此の如きは國家としても個人としても、大に注意せねばならぬ事、詳しくは動態研究の際に説く。

資本財配合の不均衡は、金利を正當以上に高める。固定設備を活用する爲めには、

利子が高くとも、借金をせねばならぬからである。斯くて流動資本借用の負擔は、自己の資本で作りに上げた固定資本にも配分される。或る種の事業をして此の如き不利な状態に陥らしめる責任は、要するに企業才能の缺乏に歸着する。

(四) 勞資配合の良否

資本財配合の不良が、企業才能の缺乏に基くに反して、資本と勞力の配合の不均衡は、事業監理法の拙劣に由る以外、社會組織の缺陷に基因する場合が尠くない。假りに日本に於いて一千萬人の人が五百億圓の資本によつて、生産を續けてゐるにせよ、一人當り五千圓の資本を要する。之れは如何なる勞働者にも、容易に調達し得ない巨額である。其處で勞働者の中には、資本の缺乏から不利な生産方法に甘んずるか、不利な雇傭契約に拘束されるとか、職業を得られないとかいふものが現はれる。勿論

産業の種類によつて、所要資本の額に差がある、併し所要資本の少い仕事に、多数の人が集中すれば、その仕事に於ける賃銀は甚しく低下して、生活を維持することに困難になる。斯くて一國に於ける産業の様式が發達して、勞力一單位に對する所要資本が多くなればなる程、無資本勞働者の地位は悪くなる。同時に、勞力の總需要高が減少して、失業が殖へて来る。稱せられる。近代式機械工業の發達に對して、社會主義者等の間に、反對の聲が高まつたのは斯ういふ理由に基くのである。果してそれが事實か否うか、此點は經濟動態研究中の最も興味ある問題として、今は姑く保留して置く。

現在事業内に於ける勞資配合の不良は、明かに企業才能の缺乏に基くものである、機械能力を最高度に働かすのには、然らざる場合より多くの勞力を要する、機械の働きを内輪に止めて置けば、その能率は低下するが、勞力費が省ける。その何れを擇ぶ

べきかは、時と場合によつて異なるが、近代機械工業に在つては、機械能力を最高度に働かすのが、最も有利な方法とされてゐる、其處で企業家は成るべく勞働時間を延長させようとする、それに關聯して起つたのが、勞働時間短縮運動である。之れも動態研究中的一題目とするを至當とする。

(五) 能率増進の研究

近來世界各國を通じて勞働能率増進の研究が盛んに行はれてゐる、その目的とする處は、個々勞働者の能率増進以外、資本財を有効に利用すること、各種資本財の配合を良くすること、一事業内に於ける勞働者、資本財との配合を良くすること、各勞働者を最適處に配置すること等を包括してゐる。即ち一事業内に於ける資本と勞力との移動を理想的に行はせようといふのが、能率増進研究の主眼である。